

第77回全国植樹祭関連事業

～こどもたちの「生きる力」を育むため、園庭や地域の森林等の整備・緑化を推進する～

こどもの森づくりフォーラム in 奈良



こどもの森づくりフォーラム実行委員会





目次



プログラム概要

フォーラム

開 会 式	実行委員長挨拶 公益社団法人 国土緑化推進機構 専務理事 織田 央 来賓挨拶 奈良県 環境森林部長 三宅 浩 奈良市 副市長 鈴木 千恵美	4
基調講演 1	学習院大学 教授 秋田 喜代美	8
基調講演 2	上越教育大学大学院 教授 山口 美和	10
事例発表 1 (自然保育)	森のようちえんウィズ・ナチュラ 代表 岡本 麻友子	12
事例発表 2 (森林環境教育)	久住林業 代表 久住 一友 / 延明保育園 園長 中島 鈴子	13
事例発表 3 (行政等による支援事例)	奈良県 地域創造部 こども・女性局 こども保育課 主査 高見 麻依奈	14
パネルディスカッション	【パネラー】秋田 喜代美 / 山口 美和 / 岡本 麻友子 / 仙田 考 / 藤平 拓志 【コーディネーター】宮林 茂幸	16
次回開催県挨拶	高知県 林業振興・環境部 林業環境政策課 全国植樹祭推進室 室長 森田 雄一	21
閉 会 式	林野庁 森林利用課 山村振興・緑化推進室 室長 岸 功規	22

分科会 1 自然保育

(事例発表)	奈良文化幼稚園 園長 角田 道代	23
	志都美こども園 園長 森下 明美	24
	やまぶき保育園 園長 中平 克子	25
	小泉造園 代表 小泉 昭男	26
(総括)	コーディネーター 田園調布学園大学大学院 准教授 仙田 考	27

分科会 2 森林環境教育

(事例発表)	十津川造林 丸谷 真希	28
	森のび 安井 洋文 / 河野 祐子	29
	大和森林管理協会 谷 茂則	30
	久住林業 久住 一友	31
(総括)	コーディネーター フォレスターアカデミー 校長 藤平 拓志	32

サイドイベント

奈良こども自然フェスタ 2025	33
自然保育講座「こどもと自然ホイスコーレ」	34
出張！奈良おもちゃ美術館	35
木育ひろば	36

パネル展

	37
--	----

参加者属性 / アンケート結果

	38
--	----

関係団体紹介

	40
--	----

資 料

こどもの森づくりフォーラム実行委員会名簿 / アーカイブ	48
------------------------------	----



プログラム概要

■ 全体プログラム

開催日	開催時間	プログラム	会 場
11月15日 (土)	10:00～15:30	奈良こども自然フェスタ2025	県営馬見丘陵公園
	10:00～14:30	自然保育講座	陽楽の森
11月16日 (日)	10:00～11:45	分科会1・2	奈良市ならまちセンター 会議室
	13:00～17:00	フォーラム	奈良市ならまちセンター 市民ホール
	11:30～17:30	パネル展	奈良市ならまちセンター ホワイエ
	10:00～15:00	出張！奈良おもちゃ美術館	奈良市ならまちセンター 多目的ホール
	10:00～16:00	木育ひろば	奈良市ならまちセンター 芝生広場

■ 分科会

【分科会1】「自然保育」

(参加者数：45名)

プログラム	担当者名	所属／役職
事例発表者	角田 道代	認定こども園奈良文化幼稚園 園長
	森下 明美	認定こども園志都美こども園 園長
	中平 克子	川上村立やまぶき保育園 園長
	小泉 昭男	小泉造園 代表
コーディネーター	仙田 考	田園調布学園大学大学院 准教授 国際校庭園庭連合日本支部 代表

【分科会2】「森林環境教育」

(参加者数：25名)

プログラム	担当者名	所属／役職
事例発表者	丸谷 真希	株式会社十津川造林 広報
	安井 洋文	合同会社森のび 代表社員
	河野 祐子	合同会社森のび 業務執行役員
	谷 茂則	一般社団法人和森林管理協会 代表理事
	久住 一友	久住林業 代表
コーディネーター	藤平 拓志	奈良県フォレスターアカデミー 校長

■ フォーラム

(参加者数：275名 ※関係者含む)

時間	プログラム	登壇者名（予定）
13:00	開会式	(公社) 国土緑化推進機構 専務理事 織田 央
		奈良県知事代理 奈良県 環境森林部長 三宅 浩様
		奈良市長代理 奈良市副市長 鈴木 千恵美様
13:15	基調講演	学習院大学 教授 秋田 喜代美氏
		上越教育大学大学院 教授 山口 美和氏
14:45	～ 休 憩 (10 分) ～	
14:55	「自然保育」実践事例	森のようちえんウィズ・ナチュラ 代表 岡本 麻友子氏
15:10	「森林環境教育」実践事例	久住林業 代表 久住 一友氏
		延明保育園 園長 中島 鈴子氏
15:25	自然保育・森林環境教育支援事例	奈良県 地域創造部 こども・女性局 こども保育課 主査 高見 麻依奈氏
15:40	～ 休 憩 (10 分) ～	
15:50	パネルディスカッション	【パネラー】
		学習院大学文学部 教授 秋田 喜代美氏
		上越教育大学大学院 教授 山口 美和氏
		森のようちえんウィズ・ナチュラ 代表 岡本 麻友子氏
		分科会1 コーディネーター 仙田 考氏
		分科会2 コーディネーター 藤平 拓志氏
		【コーディネーター】
		東京農業大学 名誉教授 宮林 茂幸氏
16:50	閉会式	高知県 林業振興・環境部 林業環境政策課 全国植樹祭推進室 室長 森田 雄一様
		林野庁 森林利用課 山村振興・緑化推進室 室長 岸 功規

こどもの森づくりフォーラムin 奈良
総合司会

2025 年度 ミス日本みどりの大使
佐塚 こころ



実行委員長挨拶

こどもの森づくりフォーラム実行委員長
公益社団法人 国土緑化推進機構 専務理事

織田 央



皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました国土緑化推進機構の織田と申します。一言御挨拶を申し上げます。

この度は、こどもの森づくりフォーラムに県内外から多くの皆様にお集まりいただき、誠にありがとうございます。また、皆様方には、日頃より緑の募金などを通じて国土緑化運動にご支援とご協力を賜り、この場をお借りして御礼を申し上げます。

さて、このフォーラムは、全国植樹祭の関連行事として令和5年から開催しており、今回の奈良県での開催は、埼玉県、愛媛県に続いて3県目ということになります。

「こどもの森づくり」と表現しておりますが、その意味するところは、主に幼児期の子どもたちを対象に、子どもたちが森や樹木に触れ合う機会を作っていこう、増やしていこうという運動とご理解いただければと思います。

そして、そのような運動を進めている理由、目的でございますが、大きく2つございまして、

一つは、子どもたちに幼児期から森や樹木に触れ合ってもらうことで、森に親しみを感じ、大きくなられてからも森を大切に思い、豊かな森づくりの応援団になってもらう、すなわち、国土緑化運動を盛り上げるということでございます。

もう一つは、森の中で遊ぶ、活動することを通じて、子どもたちの自己管理能力、共感力、コミュニケーション能力等の非認知能力の向上に資するということと言われており、そのような観点から、

子どもたちの生きる力を養うということでございます。

言い換えますと、「森を元気にすること」と「森で（子どもたちが）元気になること」の両方を目指しているのが、「こどもの森づくり」ということでございます。

本日は、基調講演として、学習院大学教授の秋田先生、上越教育大学大学院教授の山口先生からお話を賜ります。

また、パネルディスカッションでは、コーディネーターに東京農業大学名誉教授の宮林先生をお迎えし、基調講演を頂く両先生に加え、森のようちえんウィズ・ナチュラ代表の岡本様、田園調布学園大学大学院准教授の仙田先生、奈良県フォレストアカデミー校長の藤平様に参加いただきます。御登壇いただく皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

お集りの皆様におかれましては、本日のフォーラムを通じて、こどもの森づくりの意義や重要性について、改めて、ご理解を賜れば幸いです。

結びに、フォーラムの開催にご尽力を頂きました奈良県様、奈良市様をはじめ、多くの関係者の皆様に心から御礼申し上げますとともに、今回のフォーラムを契機に、こどもの森づくりが益々広がっていくこと、そして、令和9年に奈良県で開催される全国植樹祭の成功に繋がっていくことをご祈念申し上げ、挨拶とさせていただきます。

本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

実行委員挨拶

奈良県 知事 山下 真
代理 奈良県 環境森林部長

三宅 浩



皆さん、こんにちは。奈良県環境森林部長の三宅でございます。

本日、第77回全国植樹祭関連事業「こどもの森づくりフォーラム in 奈良」が、この素晴らしい秋空の良き日に、盛大に開催できますことを大変うれしく思います。また、全国各地からご来県いただきました皆さまを心から歓迎いたします。

本フォーラムの開催に向けましては、国土緑化推進機構の織田専務理事をはじめ、多くの関係者の皆さまに多大なお力添えを賜り、あらためて厚く御礼申し上げます。

奈良県では、令和9年春に天皇皇后両陛下の御臨席を賜り、四十六年ぶりとなる第77回全国植樹祭を開催いたします。「あをによし 奈良からつなぐ緑の未来」を大会テーマとして、吉野林業に代表される伝統的な育林技術と、古来、培ってきた木工技術が一体となり発展した本県独自の「木の文化」を後世に伝えるとともに、奈良県が目指す森林と人との恒久的な共生を図るための取組を一層進める契機となるよう、鋭意、大会開催に向けた準備を進めているところでございます。

一方、就学前教育・保育の分野においては、幼児期の自然体験が、自律的・主体的に行動する力をはぐくむ効果に着目し、令和4年度より「奈良っ子はぐくみ自然保育認証制度」を立ち上げ、奈良っ子の豊かな体験に繋がる自然保育の普及を推進しています。

今回のフォーラムは、「こどもの森づくり」をキーワードに開催されるものです。全国の就学前教育・保育関係者の皆さま、林業・木材産業、とりわけ森林環境教育関係者の皆さま、さらに地域住民の皆さまなど、多様な方々が一堂に会しており、未来を担う子どもたちが幼児期から森林や自然に親しむこと

の意義や重要性をあらためて認識し、またそれぞれの取組や考え方を知ることができる非常に重要な機会と考えております。本フォーラムの基調講演、事例発表、パネルディスカッションなどが、ご参加の皆さまにとって、新たな知見を得るきっかけとなれば幸いです。

また、ご参加の皆さまには、本フォーラムを通じて、分野を超えたネットワークの強化につなげていただき、急速な少子化・人口減少、デジタル技術の進化、グローバル化の進展など、激しく変化する時代を生きる子どもたちが「自ら考え」、「行動できる力」を養うことができる自然保育や森林環境教育の更なる充実にお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

話は少し変わりますが、来年放送されるNHK大河ドラマ『豊臣兄弟!』では、豊臣秀吉の弟であり、奈良県を含めた大和百万石を治めた豊臣秀長が主人公として描かれます。大河ドラマの主要な舞台が奈良県となるのは、1971年以来、実に五十五年ぶりのことです。秀長が郡山城の城主を務めた時代、大阪では、兄の秀吉の居城となる大阪城が築城されております。ここに吉野の木が多く使われたとの記録が残っております。つまり、現代に続く吉野林業にも深いつながりがあった時代でもあります。

来年は大河ドラマ『豊臣兄弟!』をぜひご覧いただき、さらにその翌年に控える第77回全国植樹祭に向けて、本県の豊かな歴史と文化に心を寄せていただくとともに、あらためて本県を訪れていただければ幸いです。

結びに、本日ご参加の皆さまのますますのご健勝、ご活躍を祈念いたしまして、ご挨拶いたします。

実行委員挨拶

奈良市長 仲川 げん
代理 奈良市 副市長
鈴木 千恵美



皆さま、このたびは「こどもの森づくりフォーラム in 奈良」にご参加いただき、誠にありがとうございます。奈良市副市長の鈴木でございます。

まずは、本フォーラムの奈良市内での開催にあたり、特に林野庁、公益社団法人 国土緑化推進機構、子どもの森づくり推進ネットワークをはじめ、多大なるご尽力をいただいた関係者の皆さま、そして遠方よりお越しの参加者の皆さまにこの場をお借りいたしまして、心より御礼申し上げます。本当にありがとうございます。

本フォーラムは、全国植樹祭の関連事業として、一昨年は埼玉県秩父市、昨年は愛媛県松山市で開催され、今年は令和9年度に開催が予定されています第77回全国植樹祭の関連事業として、この奈良市で開催される意義深い機会でございます。

昨日と本日の二日間にわたるプログラムは、「馬見丘陵公園」や「陽楽の森」でのサイドイベント、そして、本日開催の「ならまちセンター」でのフォーラムと多彩であり、参加者同士の連携やネットワー

クが深まる絶好の場です。保育や幼児教育に携わる皆さま、林業関係者、地域の方々が一堂に会され、子どもたちが自ら考えて行動する「生きる力」を育むために、「森や自然を活用した保育・幼児教育」について想いを巡らせていただき、その実践に向け具体策が生まれ、相互に繋がることをご期待申し上げます。

本市といたしましても、このフォーラムを契機に「森や自然を活用した保育や教育やふれあいの機会」について学ばせていただきます。それとともに、次世代に引き継ぐことのできる「豊かな自然と人と人とをつなぐ場」の創出に努めてまいります。

結びに、本日開催のフォーラムが実りの多い意見交換と出会いの場となり、本フォーラムの成功が全国植樹祭への機運醸成につながることを心より祈念申し上げまして、ご挨拶に代えさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。







保育における自然との出会いの重要性

学習院大学 教授
東京大学 名誉教授
秋田 喜代美



生成 AI を始め、デジタルの技術革新が急速に進んでいます。それは revolution です。しかし、私たち人間は長い時間をかけて進化してきました。それは evolution です。地球の環境と共に、多様な生物と共に人は進化してきました。子どもや私たち大人がどのような環境に適応していきながらも創造していくことが求められるのでしょうか。今から 20 年前に『あなたの子供には自然が足りない』（原著は Last Child in the Woods）というタイトルで本が出され、その中で自然欠損障害という言葉が生まれ、人間が自然から離れることでどのような対価を支払われなければならないか、自然の中での体験を取り戻すことの必要性が指摘されました。でもそれから 20 年経っても、事態は全く変わっていません。

わが国では「自然」を「じねん」と読む思想があります。「しぜん」は、客観的に存在する自然そのものを指し示す言葉であるのに対し、「じねん」は、人間の主観的な視点から自然を見ることによって、自然とのつながりを理解し、自然を守ることが重要であるという関係論的な考え方です。私は、自然と人とのつながりを示す言葉や道具を丁寧に考え、日々の中で自然とのかかわりを考える保育、自然との出会いの経験の中で質感や直感を大事にする保育がこれから一層乳幼児期に求められると思います。デジタル化社会が大人に進んでいくからこそ、今人生初期に感性や感覚を

自然の中で自然と共に培うことが大切です。たとえば色を示す日本の語は「紅色、藍色、柿色、抹茶色」等々自然とのつながりを大事にした言葉が多様にあります。桜色と桃色の違いなど微妙な色彩の相違を子どもが感じ捉えていく感覚で多様性を感知することが大事です。生きているものは、一つと同じものがなく、変化しています。自然の中にいることで、生かし生かされていることへの気づきが生まれます。これは人工物の中では育ちません。

ある幼児が偶然葉を見ていて、虫が食べた葉っぱの跡を見つけます。その気づきを通して、葉っぱだけではなく、虫と葉の関係に気づいたり、これはどの虫が食べたんだろうと葉から虫へとその関係の探究が生まれたりします。同様のことは鳥と植物、畑の中での虫との関係などでも生まれます。教えるのではなく、子ども自身がそのことに気づいていく中で自然の中での生物のつながりの探究が生まれます。こうした気づきからさらに活動が経験としてつながっていくことが保育の中ではとても大切です。「よく見る一写真などで記録する一比べる一表現する」といったつながりは自然の体験の中にでていくことで、子どもの自然への想いは深化します。このような出会いからのサイクルを園がどのように保障しているだろうか。自然だからこそ出会える多様性の発見から戸外と室内の経験がつながっていくことが、多くの園で

もっと深められてもいいのではと思います。『スロー・ルッキング』という本が今年刊行されています。ゆっくりみることは世界についての知識を得る方法です。「タイパ、コスパ」が言われる中でも自分の目でしっかりみるからこそ得られる洞察、どんなに情報を集めても自ら得た洞察にとって代わることはないというスローマインドをファストマインドの時代だからこそ求められます。英国のアリソン・クラークとい保育研究者は Slow Pedagogy ということを唱え、「一緒にいること」「子どもと共に深く潜ること」「軌道から外れること」「長い目で見ること」が子どもの時間であり、それが自然の時間なのだと言っています。自然の中で、森の中にいると私たちはこのスローなかわりを子どもも大人も共に感じ学ぶことができるのではないのでしょうか。

2050年の教育の展望ユネスコ報告書 2021年「私たちの未来を共に再考する：教育のための新しい社会契約」の中で、「2050年までに、私たちは人間が生態系の中に組み込まれており、社会的存在であるだけでなく生態学的存在であることを認識する。私たちは「自然科学」と「社会科学」の境界を取り払い、すべてのカリキュラムと教育学が生態系を意識したものとなる。」と言っています。子どもはすでにその可能性を自然や森の中

で私たち大人に示してくれています。保育の中でも循環として、自然の循環、人間の生活の中での物質の循環、子ども―園―家庭―地域のつながりと循環、時間の循環という4つの循環を私たちは意識することで生活をより豊かなものにしていくことができるのではないのでしょうか。

マリー・シェーファーは「音環境感受性」という概念を提唱し、音を感じる主体者側からの音風景とそのデザインという考え方を示しました。私は五感を通して戸外環境を子どもが自然の風景として感じ関与しながら捉えていく性向として「自然環境感受性」を育てることが必要と思っています。音、色、匂、手ざわり、味など身体の諸感覚を通じた経験が今こそ大事にされています。こうしたことをそっと伝えてくれるものに、森を舞台にした数々の絵本があります。我が国は世界第2位の森林国です。だからこそもっと森に関わる絵本と出会い、そして森や里山に出かけて行ったりすることができると思います。絵本は森の中にはいろいろな命が息づいていること、森での時のうつろい、人と森の生き物との関係を語りかけてくれます。「ワクワクは心のエンジン」ということばがありますが、森の自然はワクワクを私たちに生む場です。もっと自然との出会い森との出会いを考えていきたいと思っています。





奈良県の自然保育の魅力

～認証制度を含めた奈良県における自然保育の今後の展開について～

上越教育大学大学院 教授
日本自然保育学会 会長

山口 美和



「自然保育」とは、自然環境や地域資源を活用した保育・幼児教育を指します。2025年現在、我が国では自然保育を積極的に推進するための認定・認証制度を設置している県が6つあり、奈良県は2022年10月に、鳥取県、長野県、広島県、滋賀県に次いで全国5番目に認証制度を創設しました。奈良県の「奈良っ子はぐくみ自然保育認証制度」は、県が独自に設置した「奈良っ子はぐくみ基本方針」と「奈良っ子はぐくみ条例」の下に位置付けられており、県内に住むすべての子どもを対象に自然保育を普及していこうとする奈良県の意気込みが感じられます。「はぐくみ」という言葉は、大人が教え込むイメージが強い「教育」という言葉に代わる概念として、奈良県内の就学前の育ちを支える営みに使われています。

奈良県の自然保育認証制度の特徴として、他県のように特化型／普及型といった区分を設けず1つの類型で認証を行なっていることと、園庭以外の自然フィールドの所有を義務付けていないことの2点が挙げられます。いずれも、県内のすべての園が、園庭等の身近な自然を活用して自然保育に取り組めるようにと考えられたものです。

私は、奈良県から自然保育の認証を受けた園のうち、5つの園に足を運び、保育環境を拝見しました。天理市にある森のようちえんウィズ・ナチュラ、大和郡山市の市立矢田南幼稚園、香芝市の志都美こども園、葛城市の認定こども園奈良文化幼

稚園、同じく葛城市の市立新庄小学校附属幼稚園の5園です。

森のようちえんウィズ・ナチュラは令和4年に認証を取得し、天理市山田町付近のキャンプ場跡地を主なフィールドとして活動している園です。屋外で行われる朝の会では、タープの下で園児とスタッフが円になって座り、その日の「ココロ」と「からだ」の調子を一人ひとり言葉にしてみんなに伝えます。フィールド内の至る所に、危険回避の方法や森での過ごし方について、子どもや保護者にもわかりやすいイラストが掲示されています。フィールドでは木登りや丸太渡りなどのダイナミックな遊びだけでなく、にじみ絵などの制作をしたり、ウッドデッキで本を読む子どもの姿が見られました。

矢田南幼稚園は令和5年に認証を取得しました。園内にバタフライガーデンを作り、様々な生き物と触れ合えるよう環境を工夫しています。廊下には、子どもたちが作った図鑑が展示されています。虫や植物など一人ひとりが興味を持った対象をカメラで撮影し、観察したことを子どもたちの字で記録した手作りの図鑑です。同園は、子どもたちがチョウの幼虫を見つけ、その命が育っていく様子を見守る姿を記録した感動的なレポートで、2024年ソニー教育支援プログラムの優秀園賞を受賞しています。

志都美こども園は、商業施設と田園に囲まれた

場所に立地する園で、令和5年に認証を取得しました。園庭はそれほど大きくはありませんが、バタフライガーデンを作り、チョウの好む植物や花を植えています。園舎横にはクローバーガーデンがあり、子どもたちがバッタなどの生き物と出会う場所になっています。各保育室や廊下には生き物の飼育ケースがあり、子どもたちが生き物に関心を持って関わられるよう、クラスの保育者が工夫しているほか、園庭環境の豊かさを保護者や子どもにイラストで伝える素敵な掲示もありました。

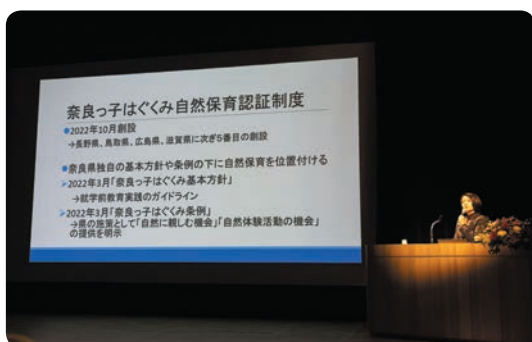
認定こども園奈良文化幼稚園は、10年ほど前から「わんぱくの森プロジェクト」と称して、園庭環境を子どもたちがさまざまなことにチャレンジできる環境に少しずつ改造してきています。園庭には大型の木製遊具やターザンロープ、焚き火スペースなどがあり、木登りができる木も数多く植えられています。柔らかさの異なる多様な土を入れた起伏のある園庭で伸び伸びと遊ぶことで、子どもたちの体幹や足腰が自然と鍛えられていくそうです。

葛城市では市内全ての公立幼稚園が認証を取得しています。このうち訪問した新庄小学校附属幼稚園では、「むしむしランド」と名付けられたバタフライガーデンが設置され、子どもたちはダン

ゴムシやバッタを捕まえたり、腐葉土の中から何かの幼虫を見つけて観察したりしていました。テラスではプランターの草花を自由に使った色水遊びやお菓子作り、園庭の中央では豪快な雨どい遊びも展開されていました。どの保育者も、生き物がどこにいるかよく知っており、子どもの興味に寄り添って虫探しをしている姿が印象的でした。

視察した園はごく一部ですが、奈良県の自然保育認証園は、園庭などの身近な自然環境を活用し、さまざまな体験や挑戦ができる環境づくりを心がけているという特徴があると感じました。何より園長先生方がとても熱心で、どの先生も、自然保育認証制度を通して自園の保育の価値を再認識したと語られたことに感銘を受けました。

私は、多くの自然保育認定・認証制度に関わってきましたが、奈良県の制度創設からフェーズが明らかに変わったと感じています。奈良県が園庭での自然保育を積極的に価値づけたことで、自然保育は決して特殊な取り組みではなく、すべての子どもに必要な体験を育むための幼児教育・保育のスタンダードとして位置付け直されたと考えています。奈良県が拓いた新しいフェーズは、今後、全国に自然保育が広がっていくための礎となるでしょう。





森のようちえんウィズ・ナチュラ 代表

岡本 麻友子



森のようちえんウィズ・ナチュラは今年で15年目を迎えました。幼児期に日々を自然の中で自己決定を積み重ね、他人と協働し、暮らしを自分の手で作っていく体験を大切にしています。

奈良県では2022年に奈良っ子はぐくみ自然保育認証制度が創設されましたが、第1号の認証施設として自然保育の本質を日々追求しています。自然は季節のめぐりや天候など、いつも変化し続け、人間にはどうもコントロールができません。自分ではどうすることもできない環境を前に、仲間と共にその環境を活かして、どう心地よく過ごしていけるか。そんな柔軟な心と体を育むことができるのが、自然の中で子どもが育つという意味の尊さを感じています。

子どもたちは毎日森でたくさんの不思議と出会います。「これはなんだろう？」自分で考えてもわからないものばかりです。森のあちこちに初めて出会う宝物のような動植物や鉱物等を目にして、触れてみて、「もっと知りたい！」という気持ちが溢れてきます。そんな時に誰かにそのワクワクする気持ちを伝えたい、分かち合いたいと、「ねえねえ、これ見て!」「これってなんだろう」と思わず声をかけてしまう。そんな場面がたくさんあります。森には分かち合いたい不思議なものと、分かち合いたい仲間がいる。コミュニケーションが自然と密に、豊かになっていきます。そんな中で自分の「好き」や関心が広がっていき、分かち合う喜びや幸せが増幅していきます。共感してもらえると嬉しい。わかってもらえる安心感。そしてまた森のあちこちでそれが循環していきます。

自然の中では幸せの循環が同時多発的に起こりやすい、ありがたい環境だと痛感しています。

森には時々、地域の方や森づくりをされている方が先生となり、子どもたちと関わってくださいます。干し柿づくりを教えてくださいだったり、田植えや稲刈りを一緒に教えてくださいだったり、木を切る演習を見せていただいたりと、たくさんの大人の姿を見ることができます。

たくさんの大人との共通体験を通じて、様々な価値観を知り、学び、カッコいい大人の背中を見ては、自分はどう在りたいかを考える時間にもなっています。今回同じく事例発表された久住さんや分科会のコーディネーターの奈良県フォーレスターアカデミー校長の藤平さんにも森のようちえんウィズ・ナチュラの歴代の子どもたちがお世話になってきました。

こういった日々真摯に森に向かう方々と森のことを考える時間が持てるということも自然保育の良いところであり、未来の森づくりにつながる可能性があるのではないかと期待しているところです。

自然保育は保育が子どもと保育者の中だけで成り立つものではなく、地域や様々な立場のたくさんの大人が子どもを真ん中に対等に未来を見つめ、共に手を取り合って生きていく可能性に気づかせてくれました。

森のようちえんでは自然の中で子どもたちがただ遊んでいるだけではなく、自然の木々や土、生き物との共生を意識しながら、自然の成り立ちや理を学んでいるのです。これは大人が言葉や理屈で教えられるものではありません。日々の体験を通して、心が動き、体が動くことで感じて理解していくのです。この取り組みが、小学校より先の子どもを取り巻く生活にも引き続き繋がっていくことを願っています。





久住林業 代表

久住 一友

【地域ごとに自然享受権のようなものをつくりたい】

所有に関係なく森林に立ち入ることが認められた国や地域が世界には多くあります。それぞれに細かいルールは違いますが、誰もが自然を享受できる権利がある国で、森を歩いている近隣住民の表情はとても穏やかです。法律や権利を作るのはすぐにできるものではありませんが、所有に関係なく誰もが森に入ることが出来る取り組みはつくれます。取り組みを通して所有者の気持ちにも変化が表れ、所有林に人が入ることに好意的になってくれる場合もあります。もちろん、山林所有者、森を使いたい人（地域住民や保育園）、私たち林業に携わる者、それぞれに立場が違い、求めていることも違いますので、三方（場合によっては更に多方）が良くなるように繋げて実現していくことも、これから日本のフォレスターには必要な役割だと考えています。

【程よく明るい森を育てる実験】

2015年。スイスでフォレスターの森づくりに対する考え方に傾倒し、居住地域で恒続林（こうぞくりん）を目指した森林を育てています。恒続林の解釈には様々な見解があり定まっていませんが、木材生産しつつも、天然更新や遷移など自然のチカラに任せる部分は任せ、樹種樹齢を分散させた構成にして、いつの時代にも木材等を収穫でき、収穫することが育林に繋がりが、人が介入しながらもずっと森林の姿を保っていく、終わりのない森だと私は考えています。10月に訪ねたスイスの林業地は美しかった。林業地を見て初めて美しいと感じました。天然更新させる、ということは林床（林の中の地表）に適度な太陽光が入らないと実現しません。この「適度」が難しい。暗すぎると発芽しないし、光を入れすぎるとクズなどのツル植物が発芽して、周囲の樹木の生長を阻害してしまいます。放置された人工林に手を入れて、程よく光が差し込み、自然の力を発揮させながら育つようにし始めたのが「薬水の森」です。



延明保育園 園長

中島 鈴子

【延明保育園における自然保育の取り組み】

当園は奈良県吉野郡にありますが、園のすぐそばに森や川がある環境ではありません。そこでご縁をいただき、久住さんが整備されている「薬水の森」を、子どもたちの自然体験の場としてお借りし、「ムッレの森」として日々の保育の中で活用しています。

ムッレの森は、普段はマウンテンバイクのコースとしても使われており、適度に整備された明るい雰囲気のある森です。森の中には、子どもたちが通れるほどの小さな道があちこちにありますが、草木が茂っているため、一見すると道のように見えません。子どもたちは、その道を歩いたり走ったり、立ち止まってじっくり観察したりしながら、それぞれのペースで自然と向き合っています。

森で過ごす時間は、子どもたちの感性をやさしく刺激してくれます。普段は気にも留めないような落ち葉の姿に「葉っぱが光っている」と感じたことを言葉にする姿も見られます。園庭にも草木はありますが、森の中で過ごす体験には、想像以上に多くの気づきや学びがあることを、私たち保育者自身が日々感じています。また、適度に整備されていることで安心して活動でき、保育者も子どもたちの姿を見守りやすい環境であることは、大きな魅力の一つです。このような自然の場を、複数の園が共有できるようになればと願っています。

自然の大切さを知っているからこそ、これまで十分な機会に恵まれなかった子どもたちにも、自然の中で過ごす経験を届けたいと思っています。森を整備する久住さんと保育を行う私たちとは目的は異なりますが、関わり合うことで想像以上の広がりが見られることを実感しました。

今回のフォーラムは、今の時代だからこそ、子どもたちが自然を体感し、感性を育てていける場づくりに関して改めて考える、あたたかな機会となりました。



奈良県 地域創造部 こども・女性局 こども保育課
主査

高見 麻依奈



行政の支援事例ということで、私の方からは、奈良県が施策として自然保育の推進を始めた経緯と、現在も実施している自然保育推進事業についてお話をさせていただきます。

【自然保育の取組経緯】

従来から、奈良県は就学前の子どもへの取組は実施しておりましたが、改めて県として県内の子どもたちが、在籍する施設（保育所、認定こども園、幼稚園等）にかかわらず、子どもの生活を取り巻く環境に応じて良質かつ適切な教育・保育を受けることができるよう、はぐくみの環境づくりにおける支援策を検討しました。

就学前における情報収集や、他府県の事例収集をしていく中で、大人になったときに、今日の複雑で予測不可能な社会を生きていくための力として、本フォーラムのテーマでもある、「非認知能力（生きる力）」が大事であり、更にこの能力は、心身の発達が顕著である、乳幼児期にこそはぐくむべきであること。また、幼児期に野外体験や外遊びの機会が多くなるほど、大人になった時に、何事にも前向きに取り組む力や、落ち込んだ時でも自分で解決して元気に振る舞える力が身についているなどがわかったことから、子どもの頃の自然体験と、この「非認知能力」の関係性はとても重要であると認識しました。

そうしたことを踏まえて、県では「就学前の教育」として、「自然保育」を推進するための事業を開始した経緯がございます。

自然保育を推進する前段階として、県内の子どもたちが、将来に夢と希望を抱き、健やかに成長できるよう、県の基本的な考え方や、方針を明らかにするために、「奈良っ子はぐくみ条例」を令和4年3月に策定し、保護者、保育者、地域で就学前教育に関わるすべての人が、同じ共通認識を持てるようにするためのガイドラインとして、「奈良っ子はぐくみ基本方針」を条例と同じタイミングで策定いたしました。

この条例や基本方針にて、就学前教育における「自然体験」の“重要性”について、県として明示した上で、後ほどご紹介する取組を進めているところでございます。

【奈良っ子はぐくみ自然保育について】

自然保育を推進する取組として、令和4年11月に「奈良っ子はぐくみ自然保育認証制度」を策定しまし

た。自然保育認証制度としては、長野・鳥取・広島・滋賀に続いて5例目になります。

当時、この制度を創設するにあたり、制度の検討ワーキンググループを立ち上げました。

メンバーは、県内の保育・幼稚園団体の代表の方はもちろんのこと、本フォーラムにもお力添えをいただいている、森のようちえんウィズ・ナチュラの代表である岡本さん、有識者として、県内の幼児教育学科のある大学の先生や、本日基調講演をいただいた、上越教育大学大学院の山口教授にもご参画いただきました。

このように、日々、保育・幼児教育に携わってくださっている皆様よりいただいた、大変貴重なご意見のもと、生まれた制度でございます。

奈良県の認証制度の特徴をご紹介します。他府県の制度では、認証区分が主に2つあります。基本的に野外で活動している団体が認証を受ける「特化型」と、屋内外の両方で活動する施設が認証を受ける「一般型」の2区分に分かれているところ、奈良県では、自然保育を推進するにあたっては、区分など関係なく、子どもたちをはぐくみたい自然保育の要素を大切にしよう、裾野（すその）を広く推進していこうという、ワーキングメンバーのご意見もいただいたこともあり、1区分での制度創設となりました。

また、自然保育をする上での“メリット”では、「子どもたちだけでなく、保育者自身が自然と触れ合うことで心身がリラックスし、自然体な素の気持ちで子どもたちと一緒に過ごすことができます。」と明記しております。

子どもが真ん中なのはもちろん大事なのですが、日々子どもたちに寄り添う“保育者”にとっても、自然保育は魅力的である。ということを感じて、我々、県やワーキンググループメンバーの思いがこもった制度であることも、特徴の1つでございます。

現在、県内の山間部だけでなく、町中にもある保育所・幼稚園や保育団体を含めた、22団体を認証しておりまして、認証した際にお渡しする認証書も、奈良県産材の和紙で作成するなど、こういった部分でも、奈良らしさを感じていただける取り組みとなっております。

令和6年度には、「自然保育」「食育」「芸術」をテーマに、保育の実践に役立つ「奈良っ子はぐくみワーク

ブック“ひとたね”を作成いたしました。各テーマを通して、日々の子どもの姿からの見取り方や、個々の子どもの特性についての考え方、子どもたちの様子に合わせた環境や道具の選び方のヒントなどを、具体的な例を示しながら紹介しております。

また、各分野での困りごとについて、有識者より、Q & A 方式で掲載し、保育現場での実践にお役に立てるようなワークブックとなっておりますので、ぜひ、ご覧になってみてください。

【自然保育推進事業について】

県が現在取り組んでいる事業について、ご紹介させていただきます。

1. 自然保育者育成研修

県内の保育者向けに年2回実施しており、県営の公園を活用したフィールドワークを通じて、実際に身近にある樹木や草花での遊び方を学んだり、危険な植物、生物や園庭の活用事例などに関するご講義をしていただくことで、実践的な知識を深める機会となっております。

この研修は、今回のフォーラムで分科会でもご講演いただいた、小泉造園の小泉先生にご協力いただいております。参加された先生方からも、毎回大講評をいただいている研修です。

また、現地研修では、森のようちえんウィズ・ナチュラ様にご協力いただき、実際の保育現場にて保育者と子どもの関わり方を見学しながら、自園での保育実践に活かせるエッセンスを持ち帰っていただける、とても素敵な研修です。

研修の醍醐味の1つであるグループワークでは、参加者のそれぞれの立場から自然保育を進める上での悩みを話すことで、共感し合ったり、アドバイスを受けたりすることができ、参加された先生方にとって、大変有意義な時間となっております。

2. 自然保育アドバイザー

自然保育にすでに取り組んでいる、またはこれから取り組もうとしている施設に対して、アドバイザーが実際に施設を訪問し、その施設の現状に応じた自然保育の実践方法について、アドバイスをしてもらえる取組です。

現場の先生方にとっては、日々の保育の中での気づきや、課題を直接相談できる機会になるため、とても心強いサポートになっております。

自然保育をする上でのちょっとした相談から、先生同士の連携の方法について、また園庭の現状に応じた季節の遊び方、樹木の剪定時期など、幅広い内容でアドバイスを受けることができ、活用した園からは、「早く実践したくてワクワク」したり、「身近な自然でこんなことができるんだ」と感想をいただいております。保育における新たな発見にもつながっている取組でござ

います。

県内の施設の皆様におかれましては、ぜひこの事業を活用いただき、保育と自然との関わりを深める取り組みにつなげていただければと思います。

3. 実践事例発表会

年度の終わり頃に実施する取組事例発表会では、県内の保育者を対象に、「自然保育」をはじめ、先ほどご紹介した保育者向けワークブックのテーマである「食育」「芸術」などをテーマに、実践園の皆さまから取り組みを発表していただいております。

なかなか他園の取組を聞ける機会も少ないというお声もあるなか、参加者の皆様にとっては、新たな発見や実践のヒントを得られる有意義な機会となっておりますので、今年度も引き続き、そうした学びの場を継続して実施していきたいと考えております。

4. 自然保育推進事業補助金

本補助金は、認証を受けた施設を対象として、自然保育の活動に必要な費用を助成するものでございます。園庭の自然保育環境における整備や、草刈りなど、自然フィールドの環境整備にかかる費用が対象となりますので、ぜひ施設の自然保育の環境整備にご活用ください。

【今後の展開：行政の役割とは】

自然保育研修等にて、参加者同士で交流することで、他園の取組を知れたり、同じ悩みを持つ先生と共感し合ったり、アドバイスをもらうことで、モチベーションの向上にもつながると考えております。今後も交流の場は継続して実施するとともに、保育者同士の繋がる場を設定することで保育者同士で質の向上を図っていきたいと考えております。交流を通して得られた知見や気づきを各園に持ち帰り、日々の保育に活かすことで、保育者一人一人の専門性の向上と、園全体の保育の質の向上につなげてまいります。

また、「実践する上での悩み事」に関しては、ぜひ県の取組を活用してください。

「こんなこと聞いていいのかな？」とか、「うちの園でも使っているのかな」というお声を聞くこともありますが、どんな些細なお悩みでも、そこを解決することによって、保育者や子どもたちにとって、より良い環境づくりにつながります。

施設に寄り添いながら県の取組を進めることが、行政の役割だと考えておりますので、ぜひ今回ご紹介した取組をご活用ください。

終わりに、県の取組が、日々子どもと向き合う保育者・保護者の皆様の「明日も頑張ろう」という気持ちを後押しするものとなれば幸いです。子どもはもちろん、保育者自身もワクワクしながら保育に向き合える環境となるよう、今後も継続して取り組んでまいります。

パネルディスカッション

- 【パネラー】(着席順) 秋田 喜代美(学習院大学 教授)
山口 美和(上越教育大学大学院 教授)
岡本 麻友子(森のようちえんウィズ・ナチュラ 代表)
仙田 考(田園調布学園大学大学院 准教授)
藤平 拓志(奈良県フォレスタアカデミー 校長)
- 【コーディネーター】 宮林 茂幸(東京農業大学 名誉教授)



宮林氏



秋田氏



山口氏



岡本氏



仙田氏



藤平氏

宮林：皆さんこんにちは。パネルディスカッションで、こどもの森づくりを全国に発展させようというのが狙いです。午前中に2つの分科会が開かれました。まずは、第1分科会と第2分科会の概要を、コーディネーターを務められた第1分科会の仙田先生、第2分科会の藤平先生からお願いします。(分科会1の概要はP23、分科会2の概要はP28をご参照ください。)

宮林：分科会の概要からほとんど結論まで出てますね。今、自然体験、自然教育、森林環境教育がなぜ必要かということ。さらには奈良県が素晴らしい認証制度を作られて、系統的に実践していることがわかりました。これは全国に広げていく流れで、大いに期待するところが大きいと思います。

日本の森林2500万ha、国土の68%が森林、その約1000万haが人工林で、およそ700万haが里山です。この里山は、暮らしや生業の中で日常的に人間が手を入れ、管理してきた森林です。しかし燃料として薪や炭を使っていたものが、電気や油に変わり、薪や炭が使われなくなった。昔は農業資材も丸太を使っていた。土木建築も木材を使っていた。それが今は、一切使われなくなって、里山は荒れている。色々な場面で子どもたちは森林と関わっていたが今はそれがなくなっている。では、どのように森林環境教育を子どもたちに享受させるかという点が重要な論点と言えます。将来、森林と人とがどのように関わっていくかという点が大事です。その将来を見据えたところに子どもが重要になります。な

ぜならば、子どもが次の世代を担っていく。その子どもたちが今どういう教育環境にあるかに視点を当てると、今なぜ環境教育が必要なのかが明らかになります。将来を担う子どもたちが自然と触れないままに育ってしまうと、想像力や感性が脆弱になり、すぐ切れる人間になってしまう。そこで環境教育、自然教育がすごく重要になってくるということです。仙田先生は今なぜ環境教育が必要だというふうに痛感されましたでしょうか？

仙田：私は大学の保育者養成に関わってる教員で、附属園は川崎にあるのですが、着任して4年ほど園庭作りを、子どもたちも含めて学生も関わって作っています。今日ご登壇いただいた3園の先生方から、最初の頃は戸惑いや先生方の意識のギャップがあったり、子どもたちが自然と関わることは大事だと理解はできるけれど、自分自身としてそこまで思えないということがあったというお話でしたが、附属園もまさしく同じプロセスを経ていました。一緒にプロジェクトをやっていく中で、先生方、園が主体となって、どんな木を植えるかどんな自然を取り戻したいとかを考えながら作っていくことを通して、子どもたちだけでなく先生方も含めて、園庭環境への愛着感、そしてこの自然をまた繋いでいかなくてはいけないということがわかってきて、その変化とともに、子どもたちが、環境が変わることによって生き生きと自然と関わっていく姿を先生方が目の当たりにして、やはり自然があるってすごく大事なことでなんだと気づいていくのです。今先生方はもっと

自分自身も何か学ばなければ、もっとできることは何だろうと考え始めるステージに来ていると思います。

宮林：自然を多く取り入れた園庭で、その中で子どもたちの変化と同時に先生方も変わっていく。その場合の緑、自然というのは、植林した園庭の木でもいいし、小さな花壇でもいい。欲を言えばプラス近くに森林があるととっても良い。森林環境、自然環境、場所は緑空間があればどこでもいいと思いました。

第2分科会では、林業家といいますか山持ちさんの皆さんが、森林環境教育の実践について、子どもから一般の人まで幅広い方々を対象とする活動の報告でした。森林を利用する皆さんを拒否するのではなくて、ウェルカムでこれから積極的に進めていきたいということです。その目標は、子どもたちのため、地域のため、そして日本のためなど次世代の人材育成に繋がっていくと思います。問題はそれをどう繋げるかという点が課題になるかもしれません。

山口先生が現在の環境教育について、子どもたちを森に入れる場合、どの年齢層までの子どもたちをと、子どもたちの年齢についてどう思われますか。

山口：私は幼児教育の専門ですが、私たちの世代が自然からだいぶ離れてしまっている状況にあります。そうすると自然との関わりが少なくなり、関心も減ります。関心が減ると自然に対して知ろうという気持ちが無くなっていく。これは意識的に自然に関わるという環境を作っていかななくては行かなくて、それを小学校でやるのでは遅いのではないかと感じています。秋田先生が質感というお話をされました。感性的なレベルで自然と一体になれる年齢の子どもたちが自然の中に入っていって、自分も自然の一部だということを実感するという体験が土台にあるこそ、自然にまた行きたいな、森は大事だなんていう気持ちが生まれ、その上に知識が積み重なっていくと思うので、やはり小さいときにいろいろな体験を自然の中でしてほしいと思います。

宮林：ありがとうございました。やはり子どもを幼児まで下げて、そこから自然体験、森の体験をより積極的に取り入れていくことが、人間形成、人間力を作る上で非常に重要ではないかと思います。岡本さんは森のようちえんを2010年から取り組まれています。卒業生がもうかなり出てくると思いますが、何か子どもたちに変化が現れていますか。

岡本：2016年に今の日常型の形にしたので、一番上の子が今、中学2年生になりました。やはりまだ

卒園児が少ないときは、私たちが森の中でやることがどのように子どもたちに影響があるのだろうとか、それを本当に模索しながらやってきました。最近は卒園してきた子たちが中学生だったり小学校高学年になってくると、やはり自分のその3年間、森の中でいろんな不思議なものとの出会い、自分でこれは何なのかなというのを考えたりとか、自分でわからないことは仲間に一緒に考えてもらったりとか、それでもわからないときは大人に聞いたりとか、何かその段階的にいろんなことを自分なりに本当に考えて行動してきたので、すごく頼もしいというか自分の言葉で語れる子たちになっているのはすごいと思っています。

宮林：自分の言いたいことを出していく、それが人間の民主主義の根本である。そういうことを学べる原点、それを自然が教えてくれる、人間は自然の一員なんだということも。秋田先生いかがでしょうか。

秋田：何が必要か、私は幼児よりも下げて乳児からと思っています。指針に書かれていないから今度書き込んで、もっと小さい年齢からにしようと思います。小学校と林業の繋がりで言えば幼小の連携接続を今、国が推進しています。私が思い出したのは長野で幼小連携と一緒に自然とか川とかでやると、学校や園とはまた違った交流が生まれることを私は体験しています。でも、山口先生が言われたように、先生、保育者の方になかなかその経験が少なくなっている。先ほど仙田先生が言われたように、保育者養成校の学生がもう一度、こういう自然が大事だと思ってくれるのが多分一番早いというか、即戦力になっていくので大事だなと思います。私の教え子でたまたま白梅大学の荒れ地を畑に作りかえたら、そうすると昔は近隣のおばあさんと大学は仲が悪かったのが、畑が作られて子どもたちと繋がって。その大学生自身、保育者とか教師になる人自身がそういう経験がないのです。必ず1回、自然とか、環境、領域環境という科目の授業があるんですけど、単に言葉ではなく、もっと体験をしていく。今日の小泉先生の話でそういうコーディネーターとか専門家をどんどん巻き込んで、SOS出すことでいろんな人がコーディネートしてくれたり、知恵を出してくれて、私も今日話聞いていていくつかわかったことがあって、それを園や学校に伝えようと。先生たちもそれならやってみようと、その刺激になる方が園や学校と繋いでくださることも大事だと思いました。

パネルディスカッション

宮林：全国植樹祭では、小学校の緑の少年団にお手伝いをお願いしているんですけど、今小学生の皆さんは忙しい。山に関わるのが実質的にできないのですが、それを幼児まで下げていただくと、多くの方が手伝ってくれて、子ども、じいちゃん、ばあちゃん、父ちゃん、母ちゃんなど家族のコミュニティが出来上がる。そういう山の付き合いに変わります。国民と森を繋げるのはやはり幼児からポイントがあるかなと。子どものみならずカルチャー教育で、お父さんお母さんも森林のことはあまり知らない人が多いと思いますから、そこまで踏み込んだらもっと森を理解する面白い結果になると思います。本テーマのフォーラムは3回目ですが、子どもの自然教育や森林環境教育は大切だ、大事だとずっと提言してきて、その具体的内容が今日、本当に理解した気がします。それは、人間形成はもちろん、将来の日本を考えたときに絶対欠かせない課題であるということです。ただ、冒頭申し上げたように、山とどう繋げていくかという課題について、山の方は木材価格が安くなって苦しいわけで、とてもウェルカムで来てくださるとまではなっていないのではないかと、幼稚園とかとの繋がりはまだできていないと思われますが、第2分科会の方で何かその辺のヒントはありませんでしたか。

藤平：フィールドと繋げるという部分では、このフォーラムで久住さんの事例発表を見ていただいたのと、分科会2で大和森林管理協会の谷さんが王寺町という都市近郊林で皆さんに開かれた森づくりを紹介されてます。林業の山じゃないところに近所のNPOさんとか入れながら、そこをハブとしているいろんな業種と繋がりを持って、新しい森の活用の仕方を社会システムの中に落とし込めないかという事例発表がありました。久住さんはスイスにおける森と人との近さみたいなところを奈良の森で作れないかという試みをされていますが、目指している方向は皆さん一緒だと思います。このような取組はこれまで、皆さんの個の力とか口コミとかによって広がってきました。しかしその部分は、行政的な仕組みの中で作るべきではないかと感じます。奈良県は平成18年から県の森林環境税を導入して、皆さんから1世帯500円、年間3億7,000万円ぐらいの税収を基に、県民全体で森を育てる機運を高めるという目標のもと、その一部を森林環境教育に充てています。その一つに、森林環境教育指導者養成研修というの

を、昔は年2回、今は1回やっていて、その研修を受けた方がこれまでに400人ぐらいになっています。里山作りの団体が整備したところをフィールドバンクとして登録して、利用したい団体とマッチングするとか、活動に必要なスキルを持った指導者を派遣するとかの仕組みはあります。

宮林：やはりそういう仕組みが見つからないと、なかなか繋ぎが出てこないのかも。園庭の植栽も先生方だけでは何を植えていいか、どういう園庭作っていいのかが見えなくて、指導者が入ることで樹種が決まり、設計図が出来るのだと思います。

今、山の方は木材の価格が安くて大変で伐っても伐っても赤字という状況です。思い切ってやるのはかなり冒険的なところがあります。森林体験を組み入れることが成功するかしないかはわからない。むしろ、下流域から、あるいは教育者側からアプローチして、ここを使わせていただけませんかという話になると繋がりやすくなると思います。そういうネットワークを、繋がりを奈良県さんからスタートしていただければモデル的な事例になるのではないかと思います。

もう一つ大切なことは、ここまで（自然教育・森林環境教育の必要性）議論が煮詰まってきたので、大きく国民運動に大きく発展していく必要があるのではないかな。誰しもが子どもに対する自然教育、森林環境教育、絶対大事で不可欠であることは見えたわけです。課題もいっぱいありますけど、これをさらに拡大して国民運動としていく必要があると思います。

私は子どもの頃、隣近所の皆さんと一緒に山に入る経験があります。何をするかというと、じい様が冬に焼く炭の材料や薪を伐る。それを森の中に3つに積み上げます。3年もん2年もん今年のもんで積まれる。その仕事が家族だけでは足りないんで、集落、隣近所の人たち子どもも連れて弁当持ちで行くんです。子どもは子どもの仕事がいっぱいあって、そこで道具の使い方だとか教わり、やってはいけないことも教わります。危険な箇所に行ってはいけないとか。自分を守るために知るべきこと。変なことをしたら手を切るとか。こういう仕組みが日常の暮らしや生業の中で行われていた、この関係を作り、どう繋ぐかとだと思います。子どもたちすべてにそのような関係や繋がりを体験できる仕組みがあるとありがたいなと思います。いや、やってもらおうような仕

組み作りができないかと思うのですが、この辺について仙田先生、何かいい知恵ないですか。

仙田：園庭緑化の指導者・支援者の立場で、小泉先生も私も尽力をしています。分科会は園庭緑化や自然保育と森林環境教育ということですが、実はこの間がないのですね。子どもたちに森林への興味を持ってもらいたいとは思っていますが、私の大学は川崎で、大きな森林はないのです。しかし里山、市民の森はあるのです。森林に繋げていくには距離もあるし、心理的なハードル、遠さがあります。どうしても園庭緑化の話はそこで止まってしまう。そうではなく、地域の自然を考えていく、果ては遠くの森林まで意識を向けてほしい、その中に入ってほしいとの思いがあります。このフォーラムの事務局をなさっている子どもの森づくり推進ネットワークさんは、東北の被災地の震災復興支援として、三陸の子どもたちがどんぐりを拾い、それを全国の協力園に送って苗を育ててもらい、その苗を三陸に戻して現地の子どもたちが植えて森を復興させるプロジェクトをやっておられているのですが、当時の代表の清水さんから、園庭緑化が活性化しない、園庭緑化運動を進めていきたいという話を頂き、私も一緒にやらせてもらっています。どうしても園庭の話だけになってしまうというそのお話の中にヒントをいただいて、大学の附属園と始めたプロジェクトがあるのですが、川崎市の大学の近くに王禅寺四ツ田緑地があって、そこに彼らは園外保育、私たちは授業の学外研修という形で一緒に行き、子どもたちと本当の里山の中で遊び体験し、どんぐりをそれぞれ持ち帰る。それを育てて、2年後に植えに行くことをやります。今年初めてその2年後が実現して、四ツ田緑地に学生が育てたどんぐりを子どもたちと一緒に植えることができました。これが大きなスタートだと思っていて、そのような形で植林をしていく体験が、子どもたちに根付いていく、学生たちに根付いていくと思います。園庭と森林の間を繋ぐその地域の森を作っていくこと、それが森林への興味・活動に繋がっていくと考えています。

宮林：東北の畠山さんは、牡蠣の養殖をされていた方ですが、森は海の恋人って発言されました。漁民の皆さんを集めて上流の森林に植林をしたんです。栄養分を含んだ水が海に流れて行って海洋資源が潤沢になる。綺麗な水が常に出てくる。結局、上流と下流は深い繋がりがある。上流域の良い環境が下流

域に影響を及ぼす。その結果たどり着いたのが、どんぐりなどの植林活動だったのです。同様にこどもの森づくりも全国にスタートすると良いと思います。私も40年住民参加の森林づくりをやってます。40年前に植えたのはもう使えるぐらいになっています。40年前に子どもであった子たちは、今、大人になって結婚して子どもが生まれて、その子どもを連れて植林した森林に入るという繋がりがあります。親子の会話は当然山の森林の話になります。そんな体験学習のような繋がりを作ることも良いのではないかと思います。山口先生、何かアイデアはありませんか。

山口：今全然違う方向で考えていたのですが、森づくりに関わっていくときに地域の人口減少がどこでも課題になっていると。担い手がいないときに、最近に移住するとなると、人口の取り合いになってしまう。そうではなくて関係人口という考え方をお聞きして、その関係を森に持ってきて、薪を作るというときに東京から手伝いに行きたい人を募るというような仕組みを作って人手不足をその地域に関わってくれる人を募るという仕組みを作るのがいいかなと思いながらお聞きしました。

宮林：都市農村交流とかで関係人口を増やしていこうということ。地域の産業とか地域のいろいろなものに関わっていく。最終的には定住してもらおうという方向性を政策的にも進めていると思います。私は都市の人たちを森林ボランティアなどで多くの人を山村に入れることを展開しながら山村を活性化してきました。その村の森林は良く管理されて綺麗です。森林（やま）づくりという塾を開いて、都市の人が毎週土日に20人ぐらい行って、ボランティアで森林を綺麗にしています。何のためかという、健康と環境のため、それと自分たちの水を管理、確保するため。最近、地域の森を守るとは自分たちの故郷を作るという考え方に変化しています。

今、都市に人口が集中してしまった。現在は地方に30%もいないわけです。7割方が都市に集まっている。加えて木材の利用は極めて少なくなっている。すると当然、地方の森林は荒れてくる。都市との交流を深めていく中で、課題を持ちつつ提案をして、都市から農山村にお手伝いに入ってもらおうという考え方も十分あると思います。秋田先生どうですか。

秋田：新潟県の山古志村は森じゃないですけども成功例でいっぱい。コイのマークを若い人がSNSでこう発信することで、そこに定住するわけ

パネルディスカッション

じゃないけど、そこのファンになってお金を送ったり必要なボランティアをやったりと。そういうことが森でも起こっていくといいのかなと。私は人口減少地域の自治体の長を集めた総務省のサミットに出させていただいたんですね。首長さんも教育長さんも自分のところをこれからどうしたらいいのかというのを考えておられて、そういう方たちはとても自分の町や村に誇りをお持ちなので、やはり自然がいかに重要かと主張していただく、市民の活動として立ち上げていく部分と、やっぱり行政的な制度として、今日山口先生から奈良県の事例をご報告いただいて本当にすごいと思いましたが、そういうことを行政的なところの繋がりで広げていくという両面が必要になると思います。一番効果的なのは教育長がやりましょうというのが一番強いわけで、そういうところにきちんと必要性や根拠をお伝えしていくことが大事でしょうし、それは人口減少のところでは効果的だと思います。人口集中地域においても自然を知っていく形で、これから10年20年の危機感を持って、どうしたらいいのかを皆で語っていくことが大事だと思います。そういうときに効果的なインフルエンサー、SNSで若い人に発信していく。そういうことも大事なのではないかと思っていますところ。

宮林：省庁も連携事業についていろいろアイデアを出して、補助金も出しています。それが一過性で終わることが少なくありません。なぜかという補助金が終わると終わってしまう。それを持続するのは何かというやる気のあるマンパワーです。そのマンパワーは都市のマンパワーを入れる必要があると思います。この点は機会に議論していく必要があると思います。ただ心配なのは誰がそれ担うか。やはり指導者養成が必要になってきます。山口先生の奈良県の事例を見れば、適正に制度化されています。それを参考にして全国に広げていったらどうかと思います。時間が来てしまいましたので、今日の感想でもいいですし、この問題をどう広げるかに視点を当てても結構です。一言ずつ言葉をいただければと。

岡本：奈良県さんってすごいねって皆さんから言っていたいて、そうなんだなって改めてすごく感じているところです。やはり私も自分自身が奈良県で育って、田んぼとか神社の鎮守の森とかで毎日遊んでいた。その原体験が今の私にあると思うので、

やはり子どもたちにも幼児期にそういう体験をたくさんさせてあげたいと思うし。体験をしてこなかった大人も子どもと一緒にその地域の中に入っていくことで、奈良県ってすごい素敵なところなんだと、子どもたちも子育てで自分自身が育った場所に戻ってきたいとか。やはり森で育った子は森のことを考えられる子になっていると思うので、そういう活動をどんどん広げていくことを、集まってくださった皆さんとまた考えられたら嬉しいなというふうに思いました。

藤平：今日、保育の発表とかも聞かしていただいて、非常に森林環境教育と親和性もありますので、この場に集まっていた方以外も含めてですね、このネットワーク作りの何かきっかけができればいいなと思ってます。

仙田：今日は分科会1に参加させていただいて、改めてお話を聞いて本当に素晴らしい実践だと感嘆するばかりでした。奈良県が全国的な先進の事例としてリードしていったほしいと思います。これからがとても楽しみです。

山口：奈良県さんの自然保育の認定認証制度の話をしてしまいましたが、滋賀県さんは、森林部署が主導してやっていたりするので、そういうところでフィールドと保育の連携ができていったらいいのかなと思いついて聞いていました。

秋田：奈良県の認証制度は素晴らしいと思うのは、認証された園が今日も誇りを持って、責任を持って事例を報告してくれる。こういう制度そのものよりもその制度を受けたことによって、責任感が生まれて、どんどん好事例を出していったことが、そのネットワークになっていく。その責任と誇りっていうものが生まれていくような知恵を創り出されたっていうところがすごいところだし、そこに学びたいと思いました。

宮林：今回このテーマは3回目になります、本日の議論でかなり具体的な方向性が見えたような気がします。さらにこれをネットワーク、それぞれの関係諸機関のところで深めていただいて、そしてさらに問題点をブラッシュアップしていただければ国民運動として相当進むのではないかと期待します。あとは林野庁関係と文科省及び国土交通省など関連省庁や都道府県・市町村、さらには関連団体などが連携した推進組織を立ち上げるなど、さらに発展することを期待いたします。ありがとうございました。

次回開催県挨拶

高知県 林業振興・環境部
林業環境政策課 全国植樹祭推進室
室長
森田 雄一



高知県林業振興・環境部林業環境政策課全国植樹祭推進室長の森田と申します。

本日は、「こどもの森づくりフォーラム in 奈良」がこのような盛大に開催されましたことを心からお慶び申し上げます。

子どもたちが豊かな自然体験を通じて、心身の健やかな成長と未来を生き抜く力が育まれること、さらには地域における森づくりや緑化活動の大切さを改めて実感いたしました。

森との関わりを深めることは、森林の公益的役割や、資源循環の大切さを理解する第一歩でもあります。子どもたちが森とともに生きる感性を育みながら、将来の森を守り育てる力となってくれることを期待しております。

高知県は、県土の84%を森林が占める全国一の“森林県”です。

この森林が多くの清流を育み、豊かな自然と共に地域の文化や暮らしを支えてきたことから、高知県には「人と木の共生」という、木の文化が息づいています。この木の文化を培うため、本県では、子どもたちが木とふれあい、森の恵みを学ぶための森林環境学習、そしてその指導者の養成などに取り組んでおります。

来年度は、高知県の豊かな自然や、歴史、文化、食などの魅力を存分にお楽しみいただきながら、皆さまでともに、子どもたちと森の未来を語り合えることを心より楽しみにしております。

最後になりますが、今大会の関係者の皆様に感謝を申し上げまして、次期開催県からのご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。



閉会挨拶

林野庁 森林利用課 山村振興・緑化推進室
室長

岸 功規



林野庁の岸でございます。閉会にあたりまして一言ご挨拶申し上げます。

本日は、多くの方々に本フォーラムにご参加いただき、誠にありがとうございました。

また、基調講演をいただきました、

学習院大学の秋田教授

上越教育大学大学院の山口教授

パネルディスカッションに参加いただきました宮林先生ほか皆様には、非常に興味深いお話をいただき、ありがとうございました。

さらに、分科会やサイドイベントなどにご参加いただいた皆様、今回のフォーラムの事務局の皆様にも感謝申し上げます。

さて、私、林野庁の職員でございますので、少し、森林と国民に関わるお話をさせていただきたいと思います。

令和5年に「森林と生活に関する世論調査」が行われまして、回答者の8割以上の方が、森林において、散策やウォーキングなど何かをしたいと回答しております。森林の中で活動することについて潜在的なニーズは高い状況にあると考えられます。

一方で同じ調査ですが、回答者の5割の人が、過去1年間に1度も森林に行っていないと回答しております。森林と関わる機会が少ない状況にあると考えられます。

これらからすると、森林で何かしたいけれども実際に森林に行く人は少ないということかと思えます。

つまり、森林に行くという行動を起こすためにあと少しの意識付けが必要なのではと個人的に思うところです。

そういったことを考えますと、幼児期を含め子どもの時に、「森林って楽しいな」と感じる経験をして、森林への興味・関心を心に刻んでもらって、森林が好きな大人に成長していってくれば、もっと森林に足を運んでももらえるようになるのではないかと、将来的に、この世論調査の結果も違ったものになってくるのではないかと、実際にそうなるってほしいなと思うところです。

そういった観点でも、今回のフォーラムでご議論いただいた、自然保育・森林環境教育は非常に重要であると考えておりますので、本フォーラムを通じてその取り組みがもっと広がってほしいと期待しているところでございます。

結びに、本フォーラムにおいて醸成された、自然保育・森林環境教育の機運の高まりが、来年のフォーラムの開催県である高知県にも引き継がれ、さらに高まっていくことを祈念いたしまして、閉会の挨拶とさせていただきます。

本日はありがとうございました。



奈良文化幼稚園（奈良市）

さあ、遊ぼう!のびのび ぐんぐん いきいきと ～「わんぱくの森」で、元気発信!未来行き～



認定こども園「奈良文化幼稚園」

園長

角田 道代

【取り組みの背景】

本園は奈良県中南部に位置し、昭和 42(1967) 年開園、令和 5(2023) 年 4 月に幼稚園型認定こども園に移行しました。創立以来、「遊びこそ学び」の教育精神のもと、「子ども時代を子どもらしく」生きてほしいと願い、教育活動を展開しています。

体力の低下、運動経験の未熟さ等の子どもの運動能力における実態や、家庭に帰ってからの外遊び機会の減少を課題とし、2015 年から園庭の大改造「わんぱくの森」プロジェクトを開始しました。園庭で運動会ができなくなる…など葛藤もありましたが、1 年に 1 度の行事より子ども達の毎日の遊び環境を豊かにすることを優先するべきだと教職員で覚悟を決め、プロジェクトはスタートしました。

どのような園庭にしたいかを考えるにあたって、私達の羅針盤となったのは、2008 年度から本園で実施していた「みどりの幼稚園」でした。月に 1～2 度朝登園してから降園するまで一日中キャンパス内の自然の中で過ごします。短大、高校が隣接しているキャンパスは 68,766㎡と広さがあり計画的に植樹してきた樹木は 40～50 年が経ち、四季折々に変わる草木があります。また、タヌキやキジもいます。遊具や玩具もないけれど、子ども達は身体全部を使って、五感を働かせて、自然とかかわります。潜在的な感性が呼び覚まされ、生き生きと遊ぶ子ども達の姿に、自然の持つ大きな力、魅力を感じました。今この幼児期における自然との直接体験が心の中に蓄積され、やがて人として生きる本質的な力につながるのだと確信しました。

【「わんぱくの森」プロジェクト】

2015 年、園庭を「屋根のない保育室」ととらえ、子ども達が自由に主体的に夢中で遊びこむ環境にしたいと「わんぱくの森」プロジェクトを開始しました。

「わんぱくの森」に必要な要素は?…私達は次の 3 つの要素で構成したいと考えました。

- ① 挑戦意欲をかきたてる遊具を配置し、子ども自ら選択して遊ぶ。(意欲が育つ)
- ② 土、水、木、草などの自然素材に囲まれて、心を開放して遊ぶ。(夢中で遊ぶ)
- ③ 異年齢も自然に交流して遊び、友達と共に成長しあう。(響き合う)

こうして徐々に緑が増え、自然素材と木製遊具で構成した「わんぱくの森」の実際(10 エリア)を映像で紹介しました。子どもの動き、遊びの様子を見ながら、試行錯誤し、常に進化を図ってきました。「わんぱくの森」づくりには、保育者だけでなく、保護者も参加し、共に汗を流す時間を大切にしています。

【「わんぱくの森」での子ども達の姿】

まず、自然保育による心の開放が土台となり、子ども達が自分のペースで様々な挑戦を試みる環境になったと感じています。自分の心と体と頭と向き合い、TRY & ERROR を繰り返す姿から「できることもすごいけど、できないこともすごいこと」と感じています。挑戦してできた怪我は、誇らしそうにまるで勲章のように見せてくれます。小さな怪我は大きな怪我の予防になる、こうして危機察知能力を身につけていくのだと実感しています。

また、意欲をためて、できたときの喜び、達成感はひとしおです。安心できる仲間や先生に見守られながら、つながって群れて遊ぶ楽しさも感じています。

そして、身近に自然に触れることができる環境だからこそ、根気よく、繰り返し、楽しく遊び、工夫し、発見し、発展させる姿があります。雑菌の中で育つ逞しさも感じられます。素直に感じ、表現する柔らかさに感心します。

子ども達一人ひとりに“物語”が生まれ、私達大人(保育者と保護者)にはそれを見守る“喜び”があります。

【発表を終えて】

子どもの中で何が育っているのかを見つめながら、自然保育を出発点として、「わんぱくの森」をつくってきました。環境を整えるのは大人の役目と考えてきましたが、これからはその環境づくりに子ども自身ももっと参加できる方法を考えていきたいです。

また、フォーラムを通して、保育業界以外の専門家のお話も聞き、業種を超えてつながっていくことでもっと世界は広がると感じました。安全面等を考えるとなかなか実行できずにいる「本物の森山で過ごす」こともできるかもしれないと可能性を感じました。保育における自然との出会いをこれからも大切にしていきたいです。



志都美こども園（香芝市）

自然とともに育つ ～出会いがいっぱいの園庭に～



認定こども園「志都美こども園」
園長

森下 明美

【取り組みの背景】

当園は2015年に公設民営化された後、幼保連携型認定こども園へと移行した。東側に商業施設、西側に田んぼや里山が広がる環境に位置しており、かつては遊具中心の園庭であった。園庭で毛虫が見つかる「危険なもの」と捉え、すぐに駆除することが日常であった頃、パンジーにいたツマグロヒョウモンの幼虫を見つけた年長児が「飼いたい」と話す場面があった。しかし食草であるパンジーはプランターの花であることを理由に摘むのを止められ、子どもの思いを諦めさせてしまった。この事をきっかけに、私は自宅のミカンの木からアゲハの幼虫を持ち込み、飼育ケースに成長過程がわかる表示を添えて職員室前に設置した。子どもたちや保護者の関心が高まったものの、ケースの中を見る体験にとどまり、子ども自身が自然の中で見つけ、感じ、命と関わる体験とは言い切れない課題が残った。また職員間でも、自然に対する苦手意識が強く、どのように自然と関わればよいかわからない状況であった。

【実践内容】 ～課題から、職員の意識改革や園庭環境を見直し、整備を段階的に進める～

- ① バタフライガーデンの設置：蝶の食草や吸蜜植物を植え、自然に蝶が訪れるようになった。子どもたちが卵や幼虫を自ら発見したり飼育をしたり、生き物との出会いが日常の中で見られるようになった。
- ② クローバーガーデンの設置：子どもと一緒にクローバーの種を植え、草を抜かないゾーンを設けたことで、多様な生き物が訪れ、お気に入りの虫探しのエリアとなった。
- ③ 職員への働きかけ：自然や生き物への苦手意識を無理に克服するのではなく、「自然に対する感じ方は大人もありのままでいいのでは」「飼育する時は手伝うよ」と伝え、協力体制を整えた。
- ④ 園庭づくりを学んだ専門家との出会い
園庭環境の見直しを進める中で、造園家であり自然保育アドバイザーの小泉昭男先生をお招きし、助言を受けながら園庭づくりを進めてきた。研修では、園内にある草花を使った遊びを教えていただき、これまで何気なく見ていた園庭の草花へのまなざしが職員の中で

大きく変化した。また、季節を感じられる園庭環境として植樹やフェンス緑化を進める中で、既存の木々や落ち葉にも意識が向き、遊びに取り入れる姿が見られるようになった。さらに、立ち入り禁止としていたブランコ後ろの空間にレンギョウのトンネルを設置したことで遊びの動線が広がり、職員から「ここに花を植えましょう」と主体的に環境づくりを考える声が生まれるようになった。

⑤ 地域ではぐくむ自然体験 ～地域の自然を知る～

地域の方の協力を得て、さつまいも掘りやみかん狩りを体験している。畑までの道には「くくりわな」など日頃見かけない仕掛けがあり、事前の下見を行うとともに、子どもたちには写真を見せながら「山にお邪魔する」という意識を伝えた。

また、山の斜面を園外の遊び場として提供していただき、自然の中で体を動かしながら自然に親しむ経験を重ねている。

【子どもの姿の事例：ギンヤンマとの出会い】

年長児が、飛来したギンヤンマをつかまえ数人での話し合いが始まった。「ケースに入れた方がいい」「カマキリのエサにしようか」など、それぞれが自分の考えを出し合っていた。担任は途中で判断を示さず見守っていた。しばらく観察した後、最終的にギンヤンマを自然に返すことを子どもたち自身で選択した。この事例から、子どもたちの「考える力」「話を聞く力」「命を考えようとする気持ち」といった学ぶ力の土台が育まれている姿であった。

【職員共通理解として話し合った事項】

子どもが「見つけた」「なんだろう」と立ち止まったとき、その気づきや発見に対して大人も共に立ち止まり、思いを受け止め、共感し、感動を分かち合う関わりを大切にしながら、学びの芽を育てていくことを共通理解とした。

また、園庭の木々の葉や実、草花やプランターの花についても、「とってはいけない」と一律に制限するのではなく、触れたり遊びに使ったりしながら、季節ならではの出会いを子どもと一緒に楽しむ経験を大切にする姿勢を、職員全体で共有している。

【まとめ】

自然保育とは、特別な活動を行うことではなく、日常の中にある自然との出会いそのものだと考えています。子どもの気づきや発見に大人が共感し、寄り添い、その瞬間を共に味わう体験の積み重ねが、子どもたちの感性や探求心を育み、学びへとつながっていくのだと思います。

フォーラムに参加し、他園のさまざまな実践を伺う中で、それぞれの園が環境や地域性を生かしながら自然保育に取り組んでいることを知り、本園の実践を振り返る大きな学びと励みとなりました。子どもも大人も共に学び合える「出会いがいっぱいの園庭づくり」をこれからも続けていきたいと思っています。



やまぶき保育園 (奈良市)

自然とあそぶ 自然に生きる ～自然の中で、地域と仲間とともに育つ～



川上村立 やまぶき保育園 園長
中平 克子

【取り組みの背景】

当園は吉野川の源流に位置し、周りを自然に囲まれている地形ですが、子どもの遊び場としての自然はあまり多くない環境です。以前の園舎は園庭に木が1本もなく、自然にふれる機会のごく限られていました。せっかく自然豊かな川上村で子どもたちが育ち、自然を求めて移住してくる子育て世代も多いこの地域だからこそ、“もっと保育に自然を取り入れたい！”と思うようになりました。

園の保育目標は『健やかな体と豊かな心を育み、生きる力の基礎を育む』です。この生きる力を育むための環境を自然の中で作るのがよいと考えました。ちょうど園舎が移転することになり、新しい園庭には木の実や落ち葉で日常的に遊べるように木を植え、築山や2種類の砂場、じゃぶじゃぶ池を設置し、遊びこめる環境を作りました。自然保育をする上で、危険なことに対する意識や保育士間の葛藤などをアドバイザーの“森のようちえんウィズ・ナチュラ”の岡本麻友子先生に相談しながら少しずつ取り組んできました。

【概要】

園庭だけでなく近くの森や川、芝生公園、遊歩道などに季節を問わず日常的に出かけ遊んでいます。自然の中でも絵本やシート、椅子、お絵かきセット、造形セット等を持っていき、園と同じように子どもたちのしたいことができる環境を作っています。自然物をその場で取って、そのまま造形遊びが始まります。豊かな自然の一つとして同じものがない中で、子どもたちが感じることや作るものもみんなそれぞれ違って

て、その多様性や感性に驚かされます。

自然の中で子どもたちがしたい遊びも多岐に広がり、季節やその日によっても、かかわる友達や大人によっても興味や関心の広がり方は様々です。今年も春から夏にかけて様々な生き物との出会いがありました。アオムシから蝶へ段ボールハウスを作って育てたり、川で取ってきたたくさんのオタマジャクシをカエルになるまで観察したり、ミニビオトープを作ったりと飼育の仕方を子どもたちが調べ、相談する姿がありました。もちろん上手くいかないこともたくさんありました。年少児はダンゴムシをカップにたくさん集めるけれどその先がなかったり、考えた飼育方法でもうまくいかなかったりして死なせてしまうことも。だけど大人が死なないように主導するのではなく、一緒に考え一緒に命に向き合いその時々思いに寄り添うことを大事にしています。

自然の中には危険な場所や物も多くありますが、それらは同時に子どもたちにとって大切な遊びの1つでもあります。長い棒や斜面など、身近な自然の中で子どもたちは工夫しながら遊び、挑戦する力や考える力を育てていきます。大きな怪我を防ぐための環境づくりは重要ですが、危ないからといって一方的に禁止するのではなく、「どうしたらできるか」を子どもと一緒に考えることを大切にしています。保育者同士の連携や子どもたちと危険箇所を共有する話し合いを通して、危険回避と子どもへの共感の両立を目指しています。

そして、自然遊びの中で子どもも大人もやりたいことが増えてきました。園だけでできないことは地域の施設の方、村民の方の力を借り、地域とのつながりも大切にしています。

【事例発表を終えて】

自然保育、自園の取り組みについて深く考えることができました。自然の中にあるもの自然を使った遊びはどれも本物であり、だからこそ子どもたちが目をキラキラさせて夢中で遊ぶということ。その姿を見て、一緒に遊ぶことで私たち保育者も幸せな気持ちになるということ。そして自然から教えられる学びはたくさんあり、これから生きる力の礎になっていくということを改めて思いました。



小泉造園 (京都市)

身近な自然を保育の中に



小泉造園 代表

小泉 昭男

自然の面白さってなに

自然はこちらから近づかないとわかりません。

自然とは何か？日本の自然は、二次林といわれるところ。大自然ではなく、小自然です。人の手で整備（小さな攪乱）が二次林です。小自然は身近にあります。

園庭の植木鉢、石などをひっくり返してダンゴムシを見つけます。2・3歳の子どもの生きものに触れるこの虫は、牛乳パックに入れて持ち歩きます。この目的は収穫です。原始、狩猟採集民族の時代1万年続いたなごりだと私は考えています。生きものは、部屋の隅に置き去りにされて、干からびて死んでしまいます。保育士が見つけて、「いのち」の大切さを子どもに伝えます。でも2・3歳の子どものダンゴムシの「いのち」について伝えるには、むづかしく、捕まえるのは収穫のためです。「いのち押し売り」はしないでほしいと思います。「本当のいのちを大切にするには、たくさんの虫を殺して、花を摘んでおくことが大事」と奥本大三郎（フランス文学者）は言います。「いのち」の死は幼児期の後半にならないとわかりません。捕まえることから始まります。生きもの（植物も含めて）は面白く、捕まえなければ、生きものの不思議に気づくことはありません。飼育とは「命の預かり、その重さを知ること」。飼育・観察することでより、その生きもの・植物の面白さに気づくことができるのです。また死んでしまうと埋めてしまうことがあります。できれば標本にして残してほしいと思います。

保育士の方で、昆虫（特にケムシ）などを気持ち悪がる方もおられます。保育士は、生きものの不思議さ面白さを知っていることが大事です。

タテハの仲間を飼育して、観察してほしいのです。この蝶には足が4本しか見えません。2本は退化しています。小さくたたまれた足が見えますが、よほどの観察力が必要です。子どもがこの不思議さに気づき、先生に「コノチョウアシガ4ホンシカナイ」といいました、先生は「よく見てごらん6本あるから」といいます。先生は概念で話していて、子どもは観察する中で話しています。不思議さは観察することから、頭で考えていること（知識）は、観察力の妨げになります。

この時期には神経系を育てるために、五感を感じる自然環境が一番大事な要素だと思います。紙面の都合で視覚 嗅覚 触覚は割愛しますが。聴覚は日本人やポリネシア人は生きものの音を左脳で聞き、言語に置き換えられます。一人一人の感性で聞くことが大事なことだと私は考えています。味覚 草花・果樹には独特の味をもっています。それはある意味毒です、動かないことで得た力があります。体に毒を持つことです。アントシアニン カテキン などを持ちます。これらはほかの生きものに食べられないためと、動かないことで紫外線から身を守る手段です。草花あそびをするうえで、この毒については、保育士は知っておく必要があります。

草花あそび 草花はとても身近な自然です。道端の草花で遊ぶ、それは大人からまたは、異年齢の集団の中で伝承されてきたものです。草花あそびは、雑草といわれるものにも価値が生まれます。

大人は、身近な自然環境すべてを受け入れることはできず、知らず知らずのうちに排除して生活しています。子どもは初めて見るものすべてに興味があり、好奇心の塊です。その姿に共感してあげてほしいと思います。自然の面白さに気づくには保育士の支えが必要です。こどもは「ナンデナン」「ドウシテ」と問いをかけてきます。答えを言えば子どもはいつまでも問いをかけ続けます。問いは子どもに預けてほしいのです。大人が教えることはしないでほしいです。子どもたちが感じたことを一緒に共感して・驚いて、時にはそのかして、発見したことはほめてあげてほしいと思います。そのためには、この面白さは 保育士がある程度知っておく必要があります。子どもは多様です。そして小自然も多様です。そして多様な発見・遊びができます。

自然保育：

子どもたちの「学ぶ力・生きる力」の土台を育むための自然保育環境を考える



＜分科会 1 コーディネーター＞
田園調布学園大学大学院 准教授
国際校庭園庭連合日本支部 代表
仙田 考

分科会 1 では、「自然保育：子どもたちの「学ぶ力・生きる力」の土台を育むための自然保育環境を考える」のテーマで、奈良県及び近隣県で、日常的に幼児期の子どもたちに多様な自然の体験を提供する自然保育・園庭の自然化に取り組んでいる園、造園家から先進的な実践事例を発表いただきました。その後にパネルディスカッションと会場からの質疑応答を行いました。

幼稚園型認定こども園 奈良文化幼稚園の角田道代先生は「さあ、遊ぼう！のびのび ぐんぐん いきいきと～「わんぱくの森」で、元気発信！未来行～」と題し、子ども達が自由に主体的に、夢中で遊び込む環境の創生を目指した「わんぱくの森」プロジェクトで「挑戦する」「自然に触れる」園庭環境整備を実現し、そこで子どもたちの姿を生き生きと語っていただきました。

幼保連携型認定こども園 志都美こども園の森下明美先生は、「自然とともに育つ ～出会いがいっぱいの園庭に～」と題し、10 年前に公立保育園から民営化された本園での、アゲハの幼虫の飼育をきっかけに、バタフライガーデンの創生やさらなる園庭の自然化、園庭や地域内での自然保育の充実につながった活動実践を、エピソードを交えて熱くお話いただきました。

川上村立やまぶき保育園の中平克子先生は、「自然とあそぶ 自然に生きる ～自然の中で、地域と仲間とともに育つ～」と題し、吉野川の源流の山に囲まれた小さな村の保育園での、地域の豊かな自然（森、川、道）のなかで、四季を通した自然保育の実践を生き生きとご報告頂きました。実践を通じて、子どもも大人

もやりたいことや興味があふれ出すすがたが印象的でした。

小泉造園の小泉昭男先生は、「身近な自然を保育の中に 保育士・大人が学校では習わなかった身近な自然をすることから始めてみよう」と題し、自然とは、自然と遊ぶとはなにか、メメントモリ（生物の死の意味）、飼育とは「命の預かり、その重さを知ること」、五感とは子どもの時にとぎすまされる、自然を親しむには大人の役割が大事など、幼児期に子どもが生き物に触れる機会の大切さをお話いただきました。

以上の話題提供を受けて、パネルディスカッションではコーディネーターの仙田から、各園での自然保育や園庭緑化の取組みについてお聞きしました。

また、会場の参加者の方々にご質問をお寄せいただき、登壇者の方々にご回答いただきました。話題提供のお話からの具体的なご質問が多く、「自然保育を取り入れたことで、子どもたちだけでなく保育者にも変化はありましたか」「職員の共通理解についてお聞きしたい、園長の方針なのか、どのように同じ方向へ向かって行ったのか知りたい」「小泉先生：害虫なんていう虫はいない、というところについてもう少しお聞きしたい」などがありました。会の終わりに、基調講演者の秋田喜代美先生と山口美和先生のおふたりから、自然保育・園庭緑化を行いたい園のみなさんに向けて、あたたかなエールをいただきました。

今回ご登壇の発表園 3 園は奈良県自然保育認証制度の認証団体で、小泉先生は研修会講師として関わられています。発表を通して、自然保育や園庭緑化のすばらしい実践、展開のためのサポートの充実さに、奈良県での自然保育認証制度の成功が物語られていると感じました。と同時に印象的なことは、発表 3 園ともに、現在の環境や実践が一夜にして成ったのではなく、園も保育者もさまざまな試行錯誤の末にたどり着いた道のりであったということです。子どもたちのすがたを踏まえ、保育者、園の小さな挑戦の積み重ねが、豊かな自然保育、園庭緑化につながっていくのだとあらためて気づきました。本会がそれぞれの園での自然保育、園庭緑化への小さくて大きな一歩につながりますことを、心より願っています。

十津川造林（十津川村）

次世代につなげる森づくり ～十津川村の子どもたちと森をつなぐ～



株式会社十津川造林 広報
丸谷 真希

①【会社紹介・活動概要】

私たち株式会社十津川造林では、奈良県十津川村を拠点に、林業事業を通じて地域の森林を守り育てながら、“次世代につなげる森づくり”を行っている会社である。木材の生産や搬出などの林業業務に加え、地域の学校や子どもたち向けの森林環境教育にも力を入れており、子どもたちが森と自然に触れ、五感を通して学ぶ体験活動を多数実施している。

②【活動の背景】

「こどもの森づくりフォーラム in 奈良 2025」分科会2は、“幼児期に蒔かれた種が芽吹き、育っていくため、森林環境教育が目指すべきこと”をテーマに、子どもたちが自然と関わる体験の価値を共有する場として開催された。十津川村でも、子どもたちが森に触れる機会は以前より減少しており、木や森に対する「不思議の芽」を育てる取り組みの必要性を強く感じていた。こうした背景のもと、私たちが行う森林環境教育の事例を発表した。

③【大切にしていること】

活動で心がけているのは、子どもたちの“なんで？”という不思議を大切にし、それが自然に“調べたい”につながる流れをつくることだ。森は教科書では味わえない驚きに満ちており、五感で触れる体験を通じて「木って重い」「香りが違う」「年齢が同じなのに木の太さが違う」といった小さな発見が次の学びにつながる。また、林業の仕事の魅力を正しく伝えることも重視しており、「林業のチェーンソー伐倒はカッコいい！」という憧れを入り口に、職業としての林業の理解を深めてもらう工夫をしている。

④【活動事例】

今回の発表では、地域の小学校と連携して行う体験

活動を紹介した。代表的なものは、スギ・ヒノキの観察活動である。葉っぱ、木の実、木の断面、木くずの項目を「観察カード」に記録しながら比べていくプログラムで、子どもたちは自分の五感を使って違いを観察し、「ヒノキの方がいい匂い」「スギの葉はさわるとチクチクする」といった発見を楽しんでいた。

また、林業の現場を身近に感じてもらうために、林業機械を実際に見せ、その迫力とカッコよさを伝える場も設けた。重機が森の中で木を切る様子や作業の効率性を目の当たりにした子どもたちは、「林業って面白い」「すごい仕事だ」と興味を持つようになった。

人気の高い「丸太切り体験」では、実際にノコギリを入れ、切り落とす達成感に子どもたちが目を輝かせた。体験後には「もっとやりたい」「すごく楽しい」「達成感がある」といった声が多く、林業への興味を強く引き出す活動となっている。

先生方からは「教科書だけでは伝えられない本物の体験ができる」と大変喜んでいただいております。学校との連携も年々深まっている。現場の道具や、丸太切り体験などは、机上では得られない理解と感動を子どもたちにもたらしめている。

⑤【成果・子どもの変化】

こうした活動が続ける中で、子どもたちの変化は確かなものになっている。最初は森に対して距離を感じていた子どもも、観察カードを書き込みながら自分の発見を友達に共有したり、丸太切りの達成感を通して自然と笑顔になったりと、森との距離がどんどん近くなっていく。その結果として、林業に親しみをもつ子どもが増えてきたのではないかと。林業という職業を“危険”ではなく、“カッコいい”“面白い”“身近な暮らしにつながる仕事”として捉える子が増え、私たちの活動が地域の未来につながっていることを実感している。

⑥【まとめこれから】

今回のフォーラムを通して、自社が行ってきた森林環境教育の意義を改めて確認することができた。子どもたちの「不思議」が「調べたい」につながり、やがて「森が好き」「林業って面白い」という気持ちに育っていく。そのきっかけづくりに、私たちの活動がしっかり貢献できていることを誇りに感じている。

今後は、地域との連携を強め、十津川造林らしい“次世代につなげる森づくり”を推進していきたい。私たちの会社としても、林業の魅力を正しく伝え、子どもたちが「森の未来」を想像できる環境を整えることで、地域に信頼される存在であり続けたい。



森のび（下北山村）

森と生きる力を育む ～「森のび教室」の取り組み～



合同会社森のび 代表社員 安井 洋文
業務執行役員 河野 祐子

1) 事例発表の概要

合同会社森のびは、奈良県下北山村において、下北山村教育委員会と協働し、村内小学生を対象とした体験型森林環境教育プログラム「森のび教室」を実施している。本事業は、「森の恵みを暮らしの中で感じ、森とともに生きる感性を育む」ことを理念とし、森林と人の暮らしとのつながりを体験的に学ぶことを目的としている。

活動のフィールドは、森のびが管理・整備を行う民有林（私有林）であり、林業の施業現場そのものを学びの場として活用している点が大きな特徴である。

森のび教室は、コロナ禍を契機に「森で遊ぶ」ことから始まり、知識の習得に偏ることなく、体験を重視した活動を継続してきた。活動においては、必要以上に介入せず見守る姿勢を大切にし、地元食材を活用した食体験、刃物や火を扱う実践的な体験を通じて、楽しさの中から子ども自身が気づきを得ることを重視している。

2024年度は「身近な森の資源を活かしたものづくり」をテーマに、森林調査、選木、伐採、木のお皿（ニマ）づくり、さらに子どもたち自身が調理した料理をその木皿で食べる体験までを一連の流れとして実施した。これにより、森林と暮らしとの関係を自分ごととして捉える学びが生まれている。

今後は、保護者や地域住民にも学びの対象を広げ、「森の学び場」としての機能を高めながら、森のび教室を継続・発展させ、世代を超えて森林と関わる地域づくりを目指していく。

2) 事例発表の補足

森のび教室は、間伐や作業道開設を行っている実際

の林業の施業現場を活用して実施しているが、発表においては、「作業道があるメリット」について、以下のように、より具体的に現場の写真を用いて説明していれば、直感的に伝えることができたと考えられる。

- 1) 傾斜が比較的緩やかで足場が安定しているため、子どもや初心者でも転倒・滑落のリスクが低いことに加え、緊急時には車両による搬送が可能である。そのため、「危険を排除する」のではなく、「管理された環境で挑戦できる」場をつくることができる。
- 2) 多様な体験活動の拠点として活用できる。作業道沿いに、観察ポイント、ものづくりの場、食事・休憩の場、バイオトイレ等を配置しやすい。また、運営スタッフが全体を見渡しやすく、見守りがしやすい。



3) 事例発表を終えて これから

今回、森林環境教育の事例発表の機会を得たことで、自分たちがこれまで取り組んできた活動について、大事なことは何かを整理することができた。その上で、同じような想いを持った事例発表者の取り組みを聞くことで、今後自分たちがどのように取り組んでいくべきかを考えるきっかけとなった。

一方で、今回のフォーラムでは、自分たちが自然保育に関する具体的な実践事例を知り得る時間が少なく、子どもの成長段階に応じて変化する森林の役割や価値について、自然保育の視点からも学ぶ必要性を改めて感じた。

今後は、奈良県における自然保育および森林環境教育の実践事例について、立場の異なる多様な関係者が共有・学び合える機会を創出することが重要であると考える。また、保育士、小学校教員、将来教育現場に携わる大学生等に対しても、森林の価値や体験の重要性を実感してもらう機会を提供していく必要性を認識した。



大和森林管理協会（王寺町）

未来につなぐ大和森林文化圏構想



一般社団法人 大和森林管理協会 代表理事
谷林業株式会社 代表取締役

谷 茂則

（一社）大和森林管理協会は、奈良県北葛城郡王寺町にある「陽楽の森」に拠点を置く森林林業を事業の中心に置いた地域団体です。我々は、子供達を始め森林や林業に日常的に触れる事のない一般の人に気軽に親しんでいただけるような場所としての「陽楽の森づくり」を行っています。多くの人に気軽に何度も森を訪れてもらう中で、結果的に森林や環境について学んでもらえる場所や仕組みづくりを通じ森林環境教育の推進に寄与することを模索しています。

陽楽の森は、大阪関西圏のベッドタウンである町の中にある小さな森。私が代表を務める谷林業の若手林業チーム育成チャレンジの中で森林作業道開設の実習地として作業道を開設しました。それが結果的に、自動車でも訪れることが可能な環境の整備に繋がり、駐車場になる場所の取得、近隣のカフェオーナーと連携した森林内で開いたフェス「チャイムの鳴る森」の予期せぬ成功を経て、福祉団体が日常的に活動するに至りました。現在は、（一社）セブンイレブン記念財団の奈良セブンの森やならコープのコープの森の活動場所になり、人と自然が関わり合いながら生物多様性を高める森林として環境省の自然共生サイトにも認定されました。

2025年夏には、陽楽の森のハード整備として集客施設の建築を始めました。ここでは、カフェ、コーヒー

スタンド、薪窯によるパン屋などを企画しています。集客施設の建築は、環境省 LCCO2 削減型の先導的な新築 ZEB 支援事業に採択され、高気密高断熱性能を兼ね備え、太陽光発電によるエネルギーの現地調達も実現させます。建築部材の調達も吉野林業地の谷林業所有林での立木の自社伐採から関わり、トレーサビリティのとれた地域林業との連携も実現しています。ソフト面では、中小企業庁のローカルゼブラ事業に採択され森林を利用した 100 の事業創出に挑戦しています。

林業に挑戦する中で、森林や環境は人々の生活との日常生活とのつながりが積み重なることで、初めて適正な森林維持管理が実現することを思い知りました。林業復活の鍵は人と森の無数の小さな結節点の一つでも多く創り出すことだと考えています。森林や林業とそれを担う人がマッチングする事業群を創出しながら、明るい森林・林業の様子を見せられる森づくり実践に挑戦していきたいと思っています。

今回は、奈良県で森林環境教育に取り組まれる奈良フォレストアカデミーの皆様、下北山村森のび、十津川村十津川造林、明日香村久住林業など多くの先進的に活動されている皆様と意見交換をする貴重な時間を過ごせました。

その後、令和8年に入り、陽楽の森では、電気や水道などのインフラがひかれ、集客施設建物には屋根が伏せられ、壁もはられ、どんどんリアルな形になってきています。オープン後に多くの人を訪れることを想像しながら、森と人の接点としての森をどう創れば良いか、脱炭素社会やネイチャーポジティブ社会の実現などの必要性をいかに伝えるかを考え、一つずつ準備を進めています。

二年後に奈良で植樹祭が開かれる頃には、子供たちが楽しそうに遊びながら学べる陽楽の森を実現できるよう、これからも色々な方のご指導を仰ぎながら、みんなで取り組んでいきたいと考えています。



久住林業（明日香村）

森が身近にある暮らし



久住林業 代表

久住 一友

二十数年前、恩師に紹介され足を踏み入れた環境教育の分野では、日本の環境教育を生み出してきたパイオニアたちの熱量に圧倒されました。その後、林業と環境教育の狭間を行き来しましたが、同じ森を舞台で繰り広げられている両者が交わることはありませんでした。

今回のこどもの森づくりフォーラム in 奈良。保育園が園庭で自然に触れ合う活動を行っていたり、林業関係者が環境教育に携わったりする事例が発表されました。保育と林業、それぞれがそれぞれに活動していました。どれも素敵な取り組みですが、ここでも両者が交わらない点に違和感が残りました。

2017年から森ある暮らしラボ（通称：森ラボ）という私設コミュニティスペースを運営しています。作家が制作したり教室を開催したり、本棚オーナーがみんなの図書館を運営したり、地域や森に関する勉強会を開催しています。ここから派生して森の活動と繋げた森ラボ baton という企画が生まれたりもしました。住民から所有林についての悩み相談、活動フィールドを探す保育園からの相談など、森ラボは、地域の森に関する相談窓口にもなりつつあります（各事例はQRコードから資料を参照）。

やってみて感じるのは、それぞれが楽しく得意（専門）分野で活躍しているということ。森ラボという場を通して、様々な企画が持ち上がり開催されたり、出会った人同士が繋がり取り組みの輪が広がったり…これは1人（1社）でやっていては見る事が出来なかった光景です。また、人が関わるということは協力者が増えるということでもあり、持続できる可能性が高くなります。

森ラボの取り組みは柔軟性を持たせて自由に活動してもらっていますが、根底には「森のある暮らしを日

常にするための実験室」というコンセプトを持ち続けています。これはスイスやオーストリアで日常的に森と関わり穏やかに暮らしている人々に触れたことから着想を得て始めたからです。非日常ではなく日常。

決して儲かりすぎることのない森ラボを続けてきたのは、昨今の日本で増えている「森」や「林業」をキラキラと見せてビジネス展開している取り組みへのちょっとした反抗でもあります。もちろん、続けるには資金は必要ですし、高度経済成長期には見向きもされなかった森林や林業に目を向けられている点は良いことです。ただ、地産地消、サステナブル、SDGs、アップサイクルなど環境や未来を意識したキレイな言葉を並べた販促ツールとして林業に携わる者が上手く搾取されているだけ、という感を否めません。

素敵な建築空間の背景には木材となった木を育てた人、何代にもわたり相続税を払い続けてきた人がいるのです。華やかな舞台には出ないけれど、木材価格や景気に左右され、戦争や時代や制度に翻弄されながら、それでも諦めずに森や林を育て続けてきた人たちがいます。過去に比べ安全に関しての意識・技術は向上しているとはいえ、それでも林業は今でも死と隣り合わせです。ちょっとしたミスで命が消えてしまう。何があっても生きて帰る。今、目の前にある森林は、そういう気概で林業に携わる人々の努力によって何十年、何百年育てられてきた姿なのです。

林業経営が厳しい環境下に置かれていることに変わりはありませんが、業界人だけで取り組んでいても大きな変化は起こりません。本質的な部分で、業界外の人とどれだけ繋がれるか。共に取り組みを起こせるか。その辺りにこれからの林業、森を育て続ける可能性も隠れているように思います。

森を求めている人たちは身近にいる林業人に話しかけてみませんか。林業人は森を林をもっと人々に開放しませんか。そんなことを感じた1日でした。



幼児期に蒔かれた種が芽吹き、育っていくため、 森林環境教育が目指すべきこと



＜分科会2コーディネーター＞
奈良県フォレスターアカデミー 校長
藤平 拓志

分科会2では、林業に携わる4組5名の方に事例発表をいただきました。森林環境教育という分野は、対象とする世代、分野が幅広いのですが、普段実践している取り組みが、「自然保育」からの流れとどのように繋がられるかという観点から、あえて今回のフォーラムの開催趣旨である「幼児期の森林環境教育」に限定しない内容の発表でした。

1 事例発表の概要

株式会社十津川造林の丸谷さんは、森林率96%という十津川村にあっても、子ども達が森林に触れる機会が少なくなっている現状を危惧し、地域の将来のためにも森林・林業の魅力を伝える事が重要だという内容でお話いただきました。十津川造林では、小学校低学年、小学校高学年、中学生、高校生、社会人と幅広い層を対象に、森を好きになって遊ぶところから、林業の体験まで内容を工夫した森林環境教育を行っており、学校とのプログラムの打合せでは、教科書では感じ取れない体験メインの実習をお願いされているそうです。林業会社という強みも活かして、高性能林業機械による作業見学なども行っています。活動を通じて子ども達はスギとヒノキの違いが分かることを手始めに、不思議を感じると自分で調べるようになるという変化がみられたとのことでした。

合同会社森のびの安井さんと河野さんは、村の子ども達が暮らしのすぐそばにある森林に入って遊んだことがないという現状を見て、森林と人の暮らしのつながりを感じる人になってもらいたいという思いのもと、それを学ぶことを目的とした取り組みについてお話しいただきました。森のびでは、教育委員会と連携し小学校一年生から六年生までを対象に、単に知識として森について学ぶだけではなく、体験を通して「自分ごととして森を感じ取れる人を育てる」という理念に基づき、実際に森のびで作業道開設や間伐をしている民有林を活かして活動を行っています。

一般社団法人大和森林管理協会の谷さんは、自身が奈良県有数の森林所有者であることと、林業、特に吉野林

業が置かれている現状を鑑み、親世代と同じ森林経営をしていてはダメだと思い、森林を受け入れる社会システムづくりが必要であるという考えに至ったことから既に取り組んでいること、構想していることについてお話しいただきました。そのような社会システムを創るには、森と人とが日常的につながる仕組みが必要なので、中山間地域ではなくあえて都市近郊の北葛城郡の王寺町と上牧町の町境にある「陽楽の森」をプラットフォームフォレストと位置づけて、ここでつながる人たちを増やしていくという取り組みを行っています。年齢層を問わず、活動は多岐にわたり、社会の無数の小さな結節点の蓄積が、未来を担う子ども達の基盤になるようにチャレンジしているところです。

久住林業の久住さんは、スイスのフォレスターとの出会いを発端とし、スイスまで話を聞きに行った際に、人と森林が日常的に非常に近い関係にあったことに感銘を受け、どうして日本では人と森林がつかないのかという疑問点から、日常的に森林につながる環境づくりにつながる取り組みが必要だという事についてお話しいただきました。具体的には森林の再生や、物理的・心理的に遠い森林を住宅地にもってきて感じてもらうための古民家再生などを、子ども達を含めた住民参加型ですめることにより、人と森林との距離を近づけるという活動です。施業放置林の再生においては10年の歳月を要しましたが、当初暗かった森林が明るくかつ緑も増えたことによって、自然と人が集まるようになり、森林での活動を躊躇していた地元の保育園が園児の散策場として活用するに至ったという事例も紹介されました。

2 参加者からの質問

発表に関して分科会参加者から多数のご質問がありました。個別事例に対する質問のほか、学校との接点、コミュニティ、つながりと言った部分での質問が多数ありました。このことから、森林環境教育はつながりの中で効果を上げていく事を認識している一方で、つながりを作るのに苦労している様子がうかがえました。

3 まとめ

4組とも林業関係者であることから、実際の森林づくりの苦労を体感しており、森林の管理、林業の重要性に気づいて欲しいという願いをより強く感じました。また、参加者からの質問にもあるように、森林環境教育の主体と地域とのつながりを作っていく事の重要性も感じました。ここは行政が関与していく必要性を感じます。

自然保育で育った未就学児、森林環境教育で楽しく学んだ小学生たちが、将来、森林づくりの担い手となって活躍することを期待して止みません。

参加者の皆さんも、熱心に聴講していただきありがとうございました。

開催概要

実施日 2025年11月15日(土) 10:00～15:30

会場 「県営馬見丘陵公園」

奈良県北葛城郡河合町佐味田 2202

内容 子ども、及び親子を対象とした自然体験フェスタ

運営 奈良こども自然フェスタ実行委員会

参加者総数 1500名

森林資源の有効活用や里山再生の次世代の担い手が求められ、また、自然に触れる体験学習の価値が再評価されている今、子どもの育ちに関わる保育・教育関係者、保護者を対象とし、地域に根ざした自然体験の中で子どもたちが発揮していく『主体的に生きる力』『豊かな感性』『共生』について学びを深める機会として昨年同時期に開催した「奈良こども自然フェスタ」に続き第2回目の開催となりました。

本イベントは、「奈良県の子どもたちに自然体験を」をテーマに、自然体験やアートブース・あそび場・飲食ブース・絵本や音楽のステージが楽しめるイベントで、2022年に創設された『奈良っ子はぐくみ自然保育認証制度』が掲げる、幼児期の育ちに大切な「自然保育」「芸術」「食育」を子ども主体で体験できるイベントとして開催しました。



■ おさんぽ会

森のようちえんの保育スタッフによるおさんぽ会には17組の親子が参加しました。「子どもの見ている世界を感じてみてください」とはじめに声かけがあり、参加者は子ども達の視線で公園内の自然と出会い、自然のおもしろさや不思議さと出会っていききました。子どもも大人も身近な自然と親しみ、親子でのあたたかな思い出になるとともに、自然を身近に感じる機会となりました。

■ 体験ブース

自然保育ネットワークによる体験ブースでは、親子で楽しめる活動を準備してくれていました。本物ののこぎりで木を切る体験や箸づくりでは、普段はのこぎりやナイフなどをする機会がない子も多く、親子で最後まで根気よく集中している様子が印象的でした。子どもの発想と描きたい気持ちを膨らませしてくれる出店として、落ち葉や木の実、ススキなど様々な自然物を組み合わせ、オリジナルで作ったお面をつけて遊ぶ子ども達。フィールドのつるでのリース作りや、枝を組みあせた星形のリースもあり、自然物に触れ、自分の感性で選ぶ、自然体験の入口の様な活動でした。



■ ステージ

屋外会場の芝生エリアにステージを設置し 奈良県出身の絵本作家岡田よしあきさん、奈良を拠点に「土と平和に根ざした暮らし」を音楽に込め活動をされている根っこさん、バイオリンとピアノでオリジナル曲、ジブリジャズなどを演奏、関西を中心に活動をされている Tomoo & Saki さん、3組のゲストの方を招いて親子で芸術、音楽に触れる時間をつくりました。秋晴れの空の下、小さな子どもから大人までゲストの方々が創り出す世界観に入り込み、一緒に楽しむ姿が見られました。



■ あそび場・森のプレーパーク

奈良県でプレーパークをされている「法隆寺フォレストロニカ」「かしはら・あすか外遊びプロジェクト」によるあそび場・森のプレーパークを設置しました。普段外遊びに慣れていないような親子もたくさん来られて、他の子ども達の遊ぶ姿を見て遊びに入っていく子どもの姿が多くみられました。



開催概要

実施日 2025年11月15日(土) 10:00～14:30

会場 「陽楽の森」

奈良県北葛城郡王寺町畠田 2-882

内容 野外体験型自然保育講座

運営 森のようちえんウィズ・ナチュラ

参加者総数 33名(講師・スタッフ含む)

こどもの森づくりフォーラムのサイドイベントは北葛城郡王寺町の陽楽の森にて、森のようちえんウィズ・ナチュラが自然保育講座「こどもと自然ホイスコーレ」を開催しました。認可園の園長先生方を始め、保育者、環境教育や森林関係者、自然保育に興味のある方々など県内外から約30名の方にご参加いただき、自然保育を体験しながら幸せな保育を探究する“大人の森のようちえん、体験として、森のようちえんの子どもたちの日々の暮らしや遊びの一部である火おこし体験や、にじみ絵、あおぞら絵本コーナー、そして語り合い(対話)のひとときを過ごしました。

当日は爽やかな秋晴れの暖かい陽の光が射し、彩り始めた木々たちが風にそよぐ音や鳥たちの囁きが穏やかに響き渡る森(自然)の中で自分の自然性に出会っていく豊かな時間となりました。森のようちえんでも大切にしている火と向き合う時間。今回は一人ひとりがマッチを使って自分の火をおこし、自分だけの火を育てるワークショップを行いました。酸素、熱、可燃物。その3つが揃っても隙間がつまると火はすぐに消えてしまいます。

火を絶やし続けるには風やスペースが必要で、それは人間関係も同じ。火との距離感は人との距離感であり、火を扱うことは自分の内面を扱うこと。自分の火は自分の写し鏡でもあるのです。初めてマッチを扱う方もいましたが、いざやってみるとおもしろさや難しさにも気づいて時間を忘れて夢中になっている姿がありました。自分の火がまるで自分自身のように思えてきて愛おしく感じ、そんな自分を客観的に見つめて再確認したり、新たな自分にも出会ったり。火おこしワークショップのテーマでもある、Light the Fire～本来の自分に火を灯す～体験となりました。



にじみ絵体験では、心のままに表現する解放感や、色が滲むことで思うようにいかなかったところから偶発的な美しさに出会って感動する(セレンディピティ)体験がありました。

森の中の台湾茶席では、自然の中で心身が緩みリラックスする心地よさを体感しました。振り返りは、“わたしの気持ち、をわかち合う時間。一人ひとりが自分の言葉で振り返り、嬉しかったこともモヤモヤしたことも、話す、聴く、感じることで、相手を知り、自分を知り、共感や繋がりが生まれていきました。

自然の中に身を置くことで五感が研ぎ澄まされていく体験をしたり、子どもたちが遊びに夢中になる感覚を味わう中で、ふとあの日のあの子の姿が思い浮び、気持ちが重なって心が揺さぶられたり、日頃の保育や自分のあり方を見つめ直す時間にもなりました。

翌日のこどもの森づくりフォーラムの基調講演で秋田喜代美先生は「質よりも、質感や直感を大事にする保育を」と語られていましたが、まさにこの自然保育講座では「私はどんな質感で子どもと関わっているだろうか」と、自分自身に問いを向ける時間だったのでないでしょうか。保育は質(内容の良し悪しや価値)ではなく、質感(その人の感じ方や感覚)であり、わたしの保育の質感は、わたし自身の質感そのもの。森や自然は五感をひらき、心をほどき、感じる力そのものを育ててくれます。だからこそ、自然は大人にこそ必要なのかもしれません。“良い先生より幸せな先生になろう、これからも皆さんと共に、子どもも大人も幸せな保育を探究していきたいです。

開催概要

実施日 2025年11月16日(日) 10:00～15:00

会場 「奈良市ならまちセンター」多目的ホール

内容 木工遊具体験

運営 奈良おもちゃ美術館 (社福)檸檬会

参加者総数 150名

ここ奈良市にありますならまちセンターに出展してきました。

ならまちセンターの玄関前芝生広場には、奈良県が用意したたまごプールをはじめ、滑り台やままごとセットなどがあり、またそれ以外にも中学生による木のペン制作やタペストリー制作などのワークショップがありとても賑わっていました。

2階おもちゃ広場では、独楽(こま)やけん玉をはじめ、つみき、ワークショップコーナー、そして室内の中央付近には、奈良おもちゃ美術館での人気おもちゃを多数そろえてお待ちしていました。当日は、大変天気にも恵まれたものの、会場が2階という少しわかりにくい場所ということもあり、来館者は延べ150名程度にとどまりました。しかし、独楽やけん玉を教えて頂ける指導者をお願いしたことから、熱心に伝承あそびに熱中する方々が多くみられました。



また、奈良おもちゃ美術館オリジナルの積み木ショーも午前・午後と1回ずつ開催しました。一緒に積み木をつむことで親子の触れ合いを楽しんでいたりと、積み木を使ってドミノ倒しづくりに興じる親子さんもおられました。



ワークショップでは、独楽の絵付けを行いました。無地の木の独楽に好きな絵柄を描くワークショップです。日ごろ絵を描くことが少なくなった子どもたちを中心に、1人平均20分程集中して絵付けに挑戦していました。オリジナルの絵柄の独楽ができるとあって大変人気で、お越しになった方ほぼ全員に参加していただきました。100個あった独楽も残りわずかとなり、ワークショップへの興味関心の高さを垣間見ることができました。



木育ひろば

～親子で楽しむ木の体験～

開催概要

実施日 2025 年 11 月 16 日 (日) 10:00 ～ 16:00

運営 奈良県、(公財)奈良県緑化推進協会
奈良教育大学附属中学校 みどりの団

会場 「奈良市ならまちセンター」 芝生広場

内容 ウッドバーニング、木製遊具による自由遊び等

参加者総数 154 名



こどもの森づくりフォーラム 2025 in 奈良のサイドイベントとして、フォーラム会場前の芝生広場で、木製遊具や工作を主とした木育ひろばを開催しました。場所は、奈良公園内の猿沢池の南側に位置し、フォーラム参加者より一般観光客が多く訪れる通りに面しています。奈良県のスギやヒノキを見て触れてもらい、木の良さを五感で味わっていただくイベントとして、幼児を主な対象とした木製遊具ひろばを設置しました。朝から天候もよく、多くの幼児連れが来訪されました。木の玉プール、滑り台、箱型手押し車、木馬ならぬ木鹿、ツリー型の木の玉ころがしなどを配置していたところ、最初は親が先導して幼児も入って来ましたが、そのうち自分で興味のあるおもちゃを取り出し、元気いっぱい楽しんでいました。だんだんと遊びがエスカレートして、ちょっと危ない場面もありましたが、芝生の上に張ったブルーシートを縦横無尽に駆け回る姿がほほえましいと感じました。

単に木に触れてもらうだけでなく、木を自分で加工し、木の有効な利用も考えていただくことも念頭に、幼児・児童向けに家型の木の貯金箱づくり、また大人も楽しめるよう、県産ヒノキの木片を自分の手になじむよう加工した木片のボールペンづくり、ヒノキ

木片と革ひもを使ったウッドチャームづくり、サンドペーパーで削るマイ箸づくり、木片に様々な模様を描くウッドバーニングも同時開催しました。この木片を使った木の加工は、奈良教育大学附属中学校みどりの団の仲間たちに協力していただきました。木の良さ、あたたかさを感じるだけでなく、自分用の「小モノ」に加工して、木が使いやすく、加工しやすい材料で、身近にあるものの、あまり使われていないことも説明しつつ、小さな木片から、地球温暖化防止やカーボンニュートラルを考えて行動する人に成長してくれないかなと、淡い期待をしながら、木工体験を見守っていました。



今回は、会館の2階で開催している、「出張！奈良おもちゃ美術館」とも連携し、芝生広場を訪れた幼児連れの家族に対して、おもちゃ美術館のパンフレットを手渡して、2階の会場への誘導も図りました。親世代は、おもちゃ美術館の説明を聞いて、そこへも訪問しようと考えてくれるのですが、肝心の幼児は、目の前の遊具遊びに夢中で、この場を離れることに強い拒否反応で「イヤイヤ」の感情が丸出しであったのが印象に残りました。

いずれにしても、今回の木育ひろばの来訪者は、フォーラム参加者ではなく、圧倒的に一般の観光客で、遠くは神奈川県、愛知県、京都府など遠方から来ていました。ならまち界隈の観光目的で、少し時間があるので立ち寄った程度での参加でした。元々、あまり森や木に関心がない方へも、木の良さをアピールできる絶好の機会になったと思います。また中学生の生徒(みどりの団)が参加して、木製小物づくりの説明や何気ない会話から、木育のスタッフとして頼もしい活躍をしていただいたことは、大きな収穫でした。



パネル展

日時 2025年11月16日(日) 11:30～17:30

会場 奈良市ならまちセンター ホワイエ

展示団体

開催地	奈良県 奈良市	
協賛団体	特別協賛	(公財) イオン環境財団
	一般協賛	(一社) 日本森林技術協会
実行委員会	林野庁 (公社) 国土緑化推進機構 (公財) ニッセイ緑の財団 (特非) 子どもの森づくり推進ネットワーク	
次回開催県	高知県	
団体	森のようちえんウィズ・ナチュラ	

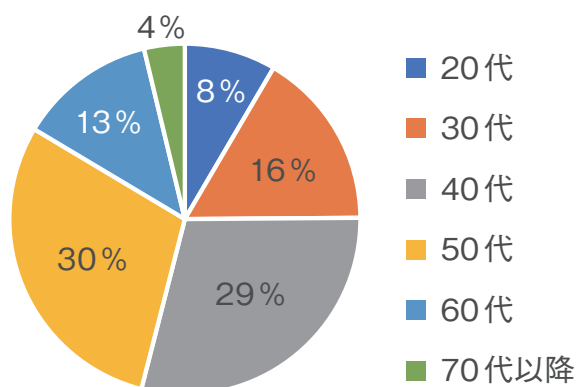
「こどもの森づくりフォーラム in 奈良」の開催に関わっていただいた組織や団体の活動をご紹介します展示会を開催しました。開催地の県や市をはじめ、保育・幼児教育関係者や森林・林業関係者、さらにご協賛団体や支援団体等、フォーラムの運営にご協力いただいた方々にご出展いただきました。当日は、フォーラム来場者に加え、サイドイベントの「木育ひろば」や「出張！奈良おもちゃ美術館」にご参加いただいた来場者にもブースをご覧いただきました。ご出展いただきました皆様に、あらためて御礼申し上げます。



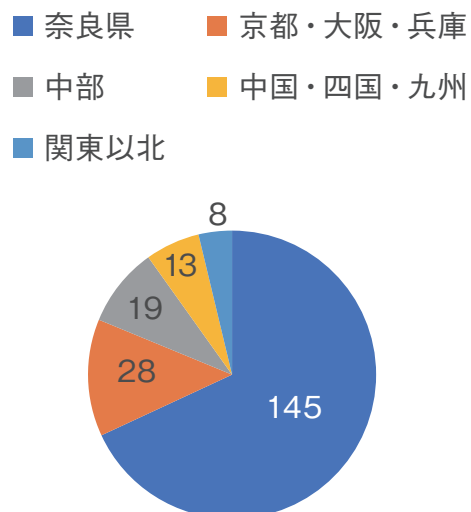
参加者属性

※参加者総数：275名（内、有効回答総数：213名 ※未回答者あり）

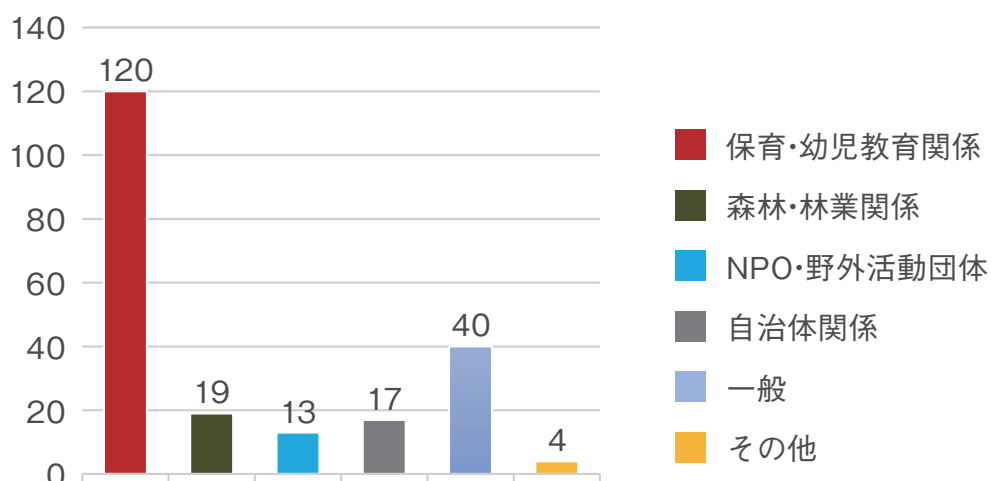
参加者年代



参加者居住エリア



参加者所属



アンケート（参加者からのご意見）

こどもの森づくりフォーラム実行委員会事務局では、今後の運営の参考にさせていただきたいと思い、参加者にフォーラム全体に関するアンケート（自由記述）をお願いしましたところ、貴重なご意見をお送りいただきました。下記に、その一部をご紹介しますいただきました。

なお、その他のご意見は、ホームページに掲載させていただきました。

住 所	所 属	年 代	ご意見
奈良県	保育・幼児教育	50代	県内の公立保育園に勤めています。フォーラムに参加して、こんなにも自然保育が根付いてきている事と、理解ある園長先生方がたくさんいらっしゃることに驚きました。
奈良県	一般	30代	秋田先生はじめ、皆さんのお話で乳幼児からの自然体験がいかにその子の今後に影響するのかが改めて確認できたような時間でした。山口先生が奈良県の認証制度について他県とどのように違い、良いのか分かりやすく説明くださったのが良かったです。岡本さんや久住さん、高見さんの事例発表では駆け足での発表だったので理解しきれずな部分があったため、もう少し時間があると良いなと思いました。
三重県	野外活動団体	40代	奈良での熱が込もった取り組みが、豊かな保育へと広がったり、もともと実践されていた園が再認識されるという状況がわかりました。皆んなで取り組もうとされている奈良県の意気込みが、素晴らしいと思いました。新たな問いに気づくことが出来ました。人と森との関係性の中には、森に生きる動物について向き合い方も併せて考えていくことが大切だと思いました。
奈良県	保育・幼児教育	30代	また機会があれば、お伺いしたいと思います!!今は幼稚園教諭として働いていますが、将来は森林教育を提供する側になりたいと考えています。もし、何かの機会で見えたら、また声をかけていただきますと嬉しいです^_^
大阪府	保育・幼児教育	40代	今回の研修に参加して世間ではこんなにも自然と保育がつながって世界が広がっているということに驚きました。そして自分たちも行っているけれど「自然保育」と名乗っているのかと不安に感じていることも「園庭」から始まる保育という視点で考えるととても身近になりました。目からうるこの視点、自分たちのやっていることを少し掘り下げていくことで深くつながると感じました。ブースや発表の展開など工夫されていてとても充実した時間でした。ありがとうございました。
奈良県	野外活動団体	40代	フォーラムはこれまで大切に紡いできた代表の繋がりが目に見えて伝わり、温かなフォーラムだったと感じます。サイドイベントもあり、子連れで家族で参加できる点もとても良かったです。森のようちえんを卒園した娘にも今度は聞かせたいと思いました。自然フェスタも体験がさまざまにあり面白かった。ようちえん3.4.5才児が過ごす場所や内容がもう少しあればいいなと思いました。分科会はすぐに満席で残念でしたが、森、自然と人との共生、一緒に育ち合い育ててもらっているのを感じる充実した二日間でした。
香川県	保育・幼児教育	60代	貴重なお話をうかがいまして、本当に刺激になりました。25年前ほどから森林ボランティアに興味を持ちました。いろいろなお話をうかがってきたのですが、20年前から同じように林業の担い手不足、人工林の手入れができていない問題があり、改善できていないようです。しかし、この10数年に「森のようちえん」が出てきて、子どもたちと若い世代の保護者さんに森、自然への興味関心が増えていることにうれしく思っています。秋田先生の多岐にわたる造詣の深さに感嘆しつつ、宮林先生の包容力に温かさを感じました。また、久住さんのように林業のプロが、子どもの環境教育に携わっていることもとても素晴らしいな…と思いました。ありがとうございました。
東京都	NPO・ボランティア団体	30代	ブース出展者としてお世話になりました。ありがとうございました。フォーラム参加者の方のみならず、出展者同士でも有意義な情報交換ができました。また、屋外で行われていた木工ワークショップや、フォーラムで紹介された自然環境教育の事例は大変勉強になりました。今後ともよろしくお願いいたします。
奈良県	企業	50代	コンピューターやスマホに子守りをさせている時代に、人と人との繋がりを密に大切にされておられるのが弊社の考え方とピッタリなので、興味をもっております。岡本麻友子さん（森のようちえんウィズ・ナチュラ代表）の教育実践が大変素晴らしく、いつも応援しております。これからの益々のご発展を御祈り申し上げます。

イオン環境財団の概要

公益財団法人イオン環境財団は「お客さまを原点に平和を追求し人間を尊重し、地域社会に貢献する」というイオンの基本理念のもと、岡田卓也（イオン株式会社名誉会長相談役）により日本で初めて地球環境をテーマにした企業単独の財団法人として、1990年に設立されました。以来、多様なステークホルダーの皆さまとともに「植樹」「環境活動助成」「環境教育・共同研究」「顕彰」の4つの事業を中心に、活動に取り組んでおります。また、持続可能な地域の実現を目的に、新たな里山づくりにも取り組んでいます。

主な事業活動



インドネシア ジャカルタ

植樹

失われたみどりを
再生するために
世界各地で
木を植えています



助成先団体(公財)
阿蘇グリーンストック(熊本県)

助成

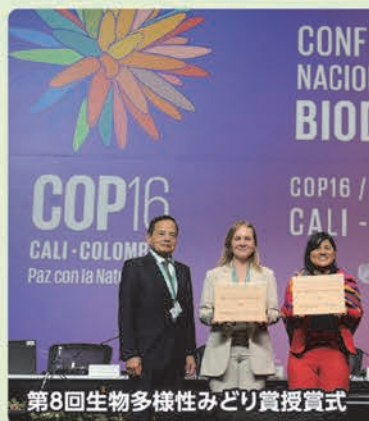
環境活動に取り
組む非営利団体に
助成しています



早稲田大学寄附講座

環境教育 共同研究

環境保全への
関心を高めるため
気づきや学びの場を
提供しています



第8回生物多様性みどり賞授賞式

顕彰

専門性をもつ
ステークホルダーと
連携して、
環境課題に
取り組んでいます

取組みをSNSで発信しています



ホームページ



Facebook



Instagram

全国植樹祭への取組み

公益財団法人イオン環境財団は、全国植樹祭の主旨に賛同し、第69回の全国植樹祭ふくしま2018より協賛しています。

第77回全国植樹祭奈良2027にも協賛予定です。

回	年	日程	開催地	テーマ	協賛内容
第69回	2018	6月10日	福島県 南相馬市	育てよう 希望の森を いのちの森を	苗木・ミネラルウォーター他協賛 サテライト会場での活動紹介
第70回	2019	6月2日	愛知県尾張旭市 名古屋市	木に託す もり・まち・人の あす・未来	苗木・ユニフォーム他協賛 サテライト会場での活動紹介
第71回	2021	5月30日	島根県 大田市	木でつなごう 人と森との 緑 えにし の輪	苗木・帽子他協賛
第72回	2022	6月5日	滋賀県 甲賀市	木を植えよう びわ湖も緑のしずくから	苗木・緑の少年団帽子 エコバック他協賛
第73回	2023	6月4日	岩手県 陸前高田市	緑をつなごう 輝くイーハトーブの森から	苗木・キャップ他協賛 サテライト会場での活動紹介
第74回	2024	5月26日	岡山県 岡山市	晴れの国 光で育つ 緑の心	苗木・キャップ・エコバック他 直前イベント会場での活動紹介
第75回	2025	5月25日	埼玉県 秩父市	人・森・川 つなげ未来へ 彩の国	苗木・備品他協賛 埼玉県民の日 県庁オープンデーにて活動紹介
第76回	2026	5月17日	愛媛県 松山市	育てるけん 伊予の国から 緑の宝	物品協賛 6/22開催1年前記念式典 10/25開催200日前式典での活動紹介

第74回全国植樹祭岡山2024での感謝状贈呈式

第74回全国植樹祭を成功へと導き、一過性のイベントとして終わらせることなく、県民を始めとする多くの方々の心に残る実り多いものとするとの、大会の趣旨に賛同し、苗木などの物品を協賛しました。

2023年12月21日(木)に岡山県庁で、感謝状をいただきました。



第76回全国植樹祭えひめ2026に向けて

当財団は、2026年5月17日(日)愛媛県総合運動公園にて開催される「第76回 全国植樹祭えひめ 2026」において使用される備品等を協賛します。



一般社団法人 日本森林林業振興会



山火事予防ポスター用原画及び標語の募集・表彰（写真左上）や植林・保育林業体験活動、森林教室・自然観察会等の活動（写真右上）などを行うとともに、森林調査、地上レーザスキャナ・ドローン空撮を用いた新たな調査手法の実証（写真中下・右下）、シスイエースをはじめとする森林・林業資材の販売活動（写真左下）等を通じて、森林・林業の振興に取り組んでいます。

<http://www.center-green.or.jp/>

一般社団法人 日本森林技術協会

一般社団法人 日本森林技術協会

私たちは
100年続く
森林の
専門集団です

あなたの
課題を解決します！



お問合せはこちらから →

〒102-0085 東京都千代田区六番町7番地 TEL 03-3261-5281(代表) Webサイト <https://www.jafta.or.jp>

一般社団法人 大阪林業土木協会

～森を守り未来をつくる治山・林道のプロフェッショナルとして～



〒540-0029 大阪府大阪市中央区本町橋六番21-512号
TEL 06-6941-9031 fax 06-6941-9034

公益財団法人 ニッセイ緑の財団

幼稚園・保育園ご関係者様

樹木名プレート(樹名板)

幼稚園・保育園の木のしおり(冊子)寄贈のご案内

公益財団法人ニッセイ緑の財団からのお知らせ。
弊財団では、こどもたちが園庭の樹木にふれあうことを通じて、身近な自然への関心を育むことを目的に、「木のしおり」「樹木名プレート」の寄贈活動を行っており、卒園記念としてもご活用いただいています。
〔小中学校向けの「木のしおり」は全国で累計1700校以上の実績〕

樹木名プレート

園庭の木の名前やイラストをこどもたちが自由に書ける
間伐材のプレート(15cm×9cmの板)を差し上げます。
2箇所の穴にヒモを通して樹木に括り付けることができます。



幼稚園・保育園の木のしおり

園庭の木の中から8種類を選んでいただき、それぞれの
写真とわかりやすい解説を掲載したオリジナルの冊子を
園児全員に差し上げます。こどもたちの気づきなどを書く
欄もあります。



ご利用いただいた先生からの声

- ◎貴重な経験になり、こどもたちからもヒノキの良い香りがすると好評でした。
- ◎「木のしおり」はこどもが持ちやすいハンディタイプで、カラフルで見やすく、解説もわかりやすかったです。
- ◎毎年、卒園記念として「樹木名プレート」を活用しています。

～お気軽にお問合せください～



公益財団法人ニッセイ緑の財団

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-21-17 虎ノ門ビル6階
電話：03-3501-9203 FAX：03-3501-5713
E-mail：info@nissai-midori.jp



お申込みはこちら



森のようちえんウィズ・ナチュラ



奈良の豊かな自然環境の中で、子どもたちひとりひとりが持つ無限の可能性の芽が出るのを信じて見守りながら、全ての大人たちも共に育つ『共育の場』です。

年間を通して四季折々の豊かな自然の中で、子どもたちの主体性を大切に保育活動を行っています。

地域の方々とも連携し、日本の原風景に子どもたちが走り回る姿を取り戻していきたいと願っています。子どもたちが大人になったとき、思い出される記憶の中にその風景が浮かび、人間としての確かな土台になっていると信じ、命の本質としての感性を育てていきます。

一緒に自然保育や対話を
探究しませんか？

森のようちえんウィズ・ナチュラ

〒632-0121
奈良県天理市山田町 638-1
お問い合わせはこちらから ▶▶▶



幸せな保育研究所
Well-being Labo



森のある暮らしラボ



森ある暮らしラボ

森のある暮らしを日常にするための実験室です
子供向け造形教室や絵画教室、森づくりの講座、
みんなの図書館(森の図書室)として開放しています



奈良県高市郡明日香村大字岡1219番地
奈良交通バス「岡寺前」もしくは「鳥庄」下車、徒歩約2分
駐車場ありません。石舞台駐車場(有料)から徒歩約5分

大和森林管理協会

2026年春

陽楽の森に新しいカフェが オープンします



王寺町と上牧町にまたがる里山
「陽楽の森」。

2026年春、この森の中に新しい
カフェがオープンします。

薪窯パンとコーヒーをご用意して
お待ちしております。



〈お問合せ先 「陽楽の森」〉

〒636-0021 奈良県北葛城郡王寺町高田2-88 Mail:contact@yamatokyo.com Tel:0745-30-9017



大会テーマ： あをによし 奈良からつなぐ 緑の未来

第77回全国植樹祭奈良2027

令和9年春、平城宮跡で開催！

全国植樹祭とは？



全国植樹祭は豊かな国土の基盤である森林やみどりに対する国民的理解を深めるために開催される、国土緑化運動の中心的行事です。

毎年春に天皇皇后両陛下ご臨席のもと、式典行事や記念植樹を行います。

奈良県では、昭和56年(1981年)に平城宮跡(奈良市)で第32回大会を開催して以来、46年ぶり2回目の開催となります。

開催理念



◆ 森林環境の維持向上が国民生活の安定的な向上に不可欠であることが国民共通の理解となるとともに、森林と人との恒久的な共生を図るための取組を一層進める契機とします。

◆ 私たちが今見ている森林はさまざまな歴史の積み重ねの上にあるという意識を持ち、伝統的な育林技術と木工技術が一体となり発展した「木の文化」を後世に伝えていきます。



大会シンボルマーク・ポスター原画



のもと たかや
野本 貴哉さん
(埼玉県在住)



かみむら とうこ
上村 貴乎さん
(増田絵画教室/
葛城市立磐城小学校6年)

※応募時

SNS

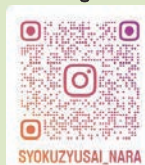


各種SNSで全国植樹祭の最新情報発信中です。
是非フォローをお願いします！

X



Instagram



Facebook



お問合せ先

第77回全国植樹祭奈良県実行委員会事務局
(奈良県環境森林部森林環境課)
〒630-8501 奈良県奈良市登大路町30
TEL:0742-27-8119 FAX:0742-24-5004

全国植樹祭奈良2027
公式ホームページはこちら



奈良市

奈良市でかなえる、なりたかった自分。
したかった暮らし。

都市の喧騒を抜け出して、自然の中で田舎暮らしをしたい。
のびのびとした環境で子育てをしたい。でも、程よいまちの利便性は欲しい。
働く場所と暮らす場所、オンとオフの切り替えができるアクセスの良い場所がいい、などなど。
今の暮らしを変えようとしたら、あなたは何を優先しますか？
豊かな自然、そして伝統や文化。それらを大切にしながらも、未来へと目を向け、
住む人の暮らしやすい環境を探究し続けている奈良市。
そこには、多様なライフスタイルを受け入れてくれる土壌があります。
暮らしの中で、あなたが大切にしたいもの。ここできっと見つかるはずです。

奈良市移住ポータルサイト

ならりずむ。

ここから見つかる、探してた暮らし



公益財団法人 奈良県緑化推進協会



令和7年度緑化作品コンクール入賞作品

緑の募金は緑豊かな郷土
づくりを応援します。

◎緑の大切さを知っていただくために

- ・緑化啓発活動・啓発イベントへの助成
- ・緑化作品コンクールの募集・表彰
- ・緑化講習会(緑と花の一日塾)

◎緑の環境を守るために

- ・森林ボランティアの活動推進
- ・公益社団法人国土緑化推進機構との連携
- ・学校環境緑化モデル事業等の推進

◎緑づくりを進めていただくために

- ・みんなの森・里山整備のための助成
- ・花いっぱい推進のための助成
- ・みどりの少年団の育成のための助成



ソフトバンク
つながる募金



公益財団法人 奈良県緑化推進協会
〒634-0033奈良県橿原市城殿町459番地
TEL : 0744-26-0200 FAX : 0744-26-0201



「緑の募金」は、身近な地域の森づくりをはじめ、国内外の森づくりや人づくりなどに大切に活用されています。



春の新緑シーズン(1月～5月)と秋の紅葉シーズン(9月～10月)の年2回
家庭募金、街頭募金、職場募金、企業募金、学校募金などによって行われています。

緑の募金に関するお問い合わせはこちらまで

公益社団法人 国土緑化推進機構 ☎ 0120-110-381
電子メールアドレス bokin@green.or.jp



林野庁

「遊々の森」とは

遊々の森は、学校等と森林管理署長が協定を結び、学校等にさまざまな体験活動や学習活動を行うフィールドとして国有林を継続的に利用していただく制度です。

森林教室や自然観察、体験林業などを通じ、子供たちの人格形成や幅広い知識の習得を行う森林環境教育の場として活用されています。（2025年3月末現在、124カ所）

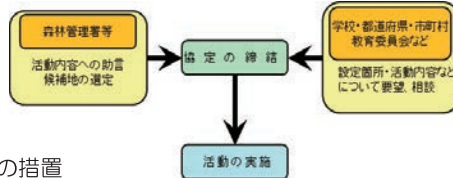
「遊々の森」活動の流れ

○遊々の森を活用いただける団体

学校、都道府県、市町村、教育委員会、学校法人など

○活用いただく場合の手続き

森林管理署長との間で、安全確保などの措置や費用負担、有効期間などの取り決めを含めた協定を締結していただきます。



森林教室



測樹体験



植樹体験

お問い合わせ先

林野庁 経営企画課 国有林野総合利用推進室 03-6744-2323

http://www.rinya.maff.go.jp/j/kokuyu_rinya/kokumin_mori/katuyo/kokumin_sanka/kyouteiseido/kyoteiseido.html

NPO法人 子どもの森づくり推進ネットワーク



～樹を植えて、子どもの心を育む～
JP子どもの森づくり運動
運営：子森ネット 特別協賛：日本郵政グループ

【子森ネットによる三つの保育者サポート事業】

1. 自然体験活動サポート

どんぐりを育てる活動等、安全で無理なく保育に取り込める自然体験活動をサポートします。

2. 園庭緑化活動サポート

園庭は、子どもたちにとってもっとも身近な自然体験フィールドです。それぞれの園の事情に応じた、手づくりの園庭緑化活動をサポートします。（※連携：国際校庭園庭連合日本支部）

3. 保育防災活動サポート

多くの子どもを預かっている保育施設では、一般的な防災マニュアルは通用しません。保育施設に特化した、実践的な保育防災の仕組みづくりをサポートします。



※活動の詳細については、右のQRコードよりホームページをご覧ください。

NPO法人子どもの森づくり推進ネットワーク（略称：子森ネット）info@kodomono-mori.net

※子森ネットは、「こどもの森づくりフォーラム」の運営事務局を担当しています。

こどもの森づくりフォーラム実行委員会名簿

(敬称略)

氏 名	組織名・役職	備 考
岸 功規	林野庁 森林整備部森林利用課 山村振興・緑化推進 室長	常任構成団体
織田 央	公益社団法人 国土緑化推進機構 専務理事（実行委員長）	
塚原 茂	特定非営利活動法人 子どもの森づくり推進ネットワーク 代表理事	
西 卓宏	奈良県 環境森林部 森林環境課長	奈良県関係
中川 友佳子	奈良県 地域創造部 こども・女性局 こども保育課長	
笹本 祐	奈良市 観光経済部 農政課長	
室垣内 清明	公益財団法人 奈良県緑化推進協会 常務理事	
半田 康	公益財団法人 ニッセイ緑の財団 常務理事	アドバイザー
宮林 茂幸	東京農業大学 名誉教授	
仙田 満	公益社団法人 こども環境学会 代表理事	
岡本 麻友子	NPO 法人 森のようちえん全国ネットワーク連盟 副理事長	

アーカイブ

YouTube

農林水産省公式 YouTube チャンネル「**maffchannel**」に、「こどもの森づくりフォーラム in 奈良」のページが開設され、記録動画が公開されています。下記 QR コードから、全体のダイジェストや、各プログラムごとの動画がご覧いただけます。

MAFF
Ministry of Agriculture,
Forestry and Fisheries
農林水産省



登壇者発表資料

Google Drive に、発表資料（登壇者の公開許諾が取れた資料のみ）がプログラム別に公開されています。下記 QR コードからご覧いただけますのでご利用ください。





こどもの森づくりフォーラム in 奈良

【主催】こどもの森づくりフォーラム実行委員会

【実行委員会構成団体】

林野庁、(公社)国土緑化推進機構、(特非)子どもの森づくり推進ネットワーク
奈良県、奈良市、(公財)奈良県緑化推進協会、(公財)ニッセイ緑の財団

【後援】

文部科学省、環境省、こども家庭庁
(独)国立青少年教育振興機構、全日本私立幼稚園連合会
(特非)全国認定こども園協会、(公社)こども環境学会
(一社)日本環境教育学会、(一社)日本保育学会、日本自然保育学会
(公社)日本環境教育フォーラム、(公財)日本自然保護協会、(公財)日本生態系協会
(公財)日本環境協会、こどもエコクラブ全国事務局、ESD 活動支援センター
(特非)自然体験活動推進協議会、(特非)樹木・環境ネットワーク協会
国際校庭園庭連合日本支部

【特別協賛】



【協賛】

(一財)日本森林林業振興会、(公財)ニッセイ緑の財団、(一社)日本森林技術協会
(一社)大阪林業土木協会